

蒲田部木原 10

—蒲田部木原遺跡第 12 次調査報告—

2 0 1 0

福岡市教育委員会



遺跡略号 KHH-12
調査番号 0845

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する蒲田部木原遺跡第12次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで福岡市東部農業協同組合をはじめとする関係各位のご理解と、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成20年度に東区蒲田3丁目751-2において実施した蒲田部木原遺跡第12次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家・板倉有大、大庭友子が行った。
4. 製図は長家・大庭が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。なお座標は特に断らない限り日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし(一部欠番あり)、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は堅穴住居跡(SC)、土坑(SK)、溝(SD)、包含層(SX)、ピット(SP)である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0845	遺跡略号	KH H-12	
所在地	東区蒲田3丁目751-2		分布地図番号	2-0003
開発面積	1,403m ²	調査対象面積	378m ²	調査面積
調査期間	平成20年10月20日～平成20年12月5日		事前審査番号	19-2-982

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 遺跡の立地とこれまでの調査	2
III. 調査の記録	5
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	7
1) 壴穴住居跡	7
2) 土坑	16
3) 溝	20
4) 包含層	20
5) その他の出土遺物	38
6) 小結	38

挿図目次

第1図 調査区位置図 1 (1 / 50000)	3
第2図 調査区位置図 2 (1 / 6000)	4
第3図 調査区位置図 3 (1 / 500)	5
第4図 調査区全体図 (1 / 200)	6
第5図 SC003 及び出土遺物実測図 (1 / 50, 1 / 3, 1 / 4)	7
第6図 SC005 - 1, SC005 - 2 実測図 (1 / 30, 1 / 50)	8
第7図 SC005 - 1, SC005 - 2 出土遺物実測図 (1 / 4)	9
第8図 SC008 及び出土遺物実測図 (1 / 20, 1 / 50, 1 / 4)	10
第9図 SC010 及び出土遺物実測図 (1 / 50, 1 / 3, 1 / 4)	12
第10図 SC016 及び出土遺物実測図 (1 / 30, 1 / 50, 1 / 4)	13
第11図 SK001・002・004・011・012・013 実測図 (1 / 40)	14
第12図 SK001・002・004・011・012・013 出土遺物実測図 (1 / 2, 1 / 4)	15
第13図 SK014 及び出土遺物実測図 (1 / 60, 1 / 4)	18
第14図 SK015・018 及び出土遺物実測図 (1 / 40, 1 / 4)	19
第15図 SD007 断面図 (1 / 30)	20
第16図 SX006・009 土層断面図 (1 / 60)	21
第17図 SX006 出土遺物実測図 1 (1 / 4)	22
第18図 SX006 出土遺物実測図 2 (1 / 4)	23
第19図 SX006 出土遺物実測図 3 (1 / 4)	24
第20図 SX006 出土遺物実測図 4 (1 / 6)	25
第21図 SX006 出土遺物実測図 5 (1 / 4)	26
第22図 SX006 出土遺物実測図 6 (1 / 4)	27
第23図 SX006 出土遺物実測図 7 (1 / 4)	28
第24図 SX006 出土遺物実測図 8 (1 / 4)	29
第25図 SX006 出土遺物実測図 9 (1 / 4)	30
第26図 SX006 出土遺物実測図 10 (1 / 4)	31
第27図 SX006 出土遺物実測図 11 (1 / 3, 1 / 4, 1 / 6)	32
第28図 SX006 出土遺物実測図 12 (1 / 3)	33

第29図	SX009 出土遺物実測図 1 (1 / 4)	34
第30図	SX009 出土遺物実測図 2 (1 / 3, 1 / 4)	35
第31図	SX009 出土遺物実測図 3 (1 / 4)	36
第32図	SX009 出土遺物実測図 4 (1 / 3, 1 / 4)	37
第33図	SX262・265・266 及び出土遺物実測図 (1 / 80, 1 / 4)	38

写 真 目 次

写真 1	調査区全景（上空から）	
写真 2	調査区南半全景（上空から）	
写真 3	調査区全景（北から）	1
写真 4	SK014 出土焼土塊 1	18
写真 5	SK014 出土焼土塊 2	18
写真 6	調査区南東部（上空から）	39
写真 7	調査区北西部（上空から）	39
写真 8	SC003（北から）	39
写真 9	SC003（北西から）	39
写真 10	SC005 - 1・2（西から）	39
写真 11	SC005 - 1・2 完掘状況（西から）	39
写真 12	SC005 - 1 竈（西から）	40
写真 13	SC005 - 1 竈土層	40
写真 14	SC005 - 2 竈（北東から）	40
写真 15	SC005 - 2 竈土層	40
写真 16	SC008（北から）	40
写真 17	SC008 完掘状況及び土層	40
写真 18	SC008 贼床除去後出土状況（北西から）	40
写真 19	SC010（北西から）	40
写真 20	SC016（西から）	41
写真 21	SC016 完掘後（西から）	41
写真 22	SC016 竈（南から）	41
写真 23	SC016 竈土層	41
写真 24	SK001（北西から）	41
写真 25	SK002（南西から）	41
写真 26	SK004（北東から）	41
写真 27	SK004 遺物出土状況（北西から）	41
写真 28	SK011（東から）	42
写真 29	SK012（南西から）	42
写真 30	SK014 及び土層（南から）	42
写真 31	SK018 土層	42
写真 32	SX006 土層 1	42
写真 33	SX006 土層 2	42
写真 34	SX009 土層	42
写真 35	SX266 土層	42



写真1 調査区全景（上空から）

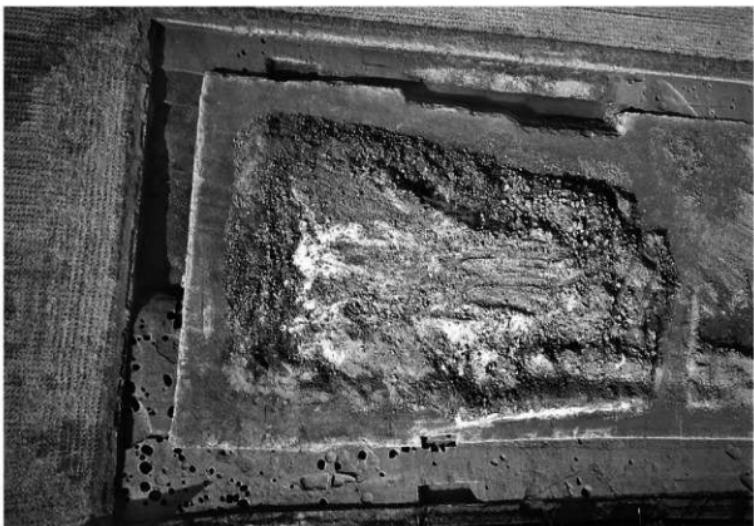


写真2 調査区南半全景（上空から）

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 20 年 3 月 24 日付けで株式会社誠光建設 代表取締役原浩一郎氏より福岡市教育委員会宛に福岡市東区蒲田 3 丁目 751-2 の物件に関して、JA 福岡市東部の共同育苗施設増設に伴う造成工事に関する埋蔵文化財の有無についての照会があった。(事前審査番号 19-2-982)。照会を受けた埋蔵文化財第 1 課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である蒲田部木原遺跡(分布地図番号 2-0003・遺跡略号 KHH)の範囲内にあるため、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者である福岡市東部農業協同組合の承諾を経て、平成 20 年 3 月 25 日に試掘調査を行い、ピット・溝・包含層等の遺構を検出した。この成果を受けて、埋蔵文化財課第 1 課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、造成工事に伴う擁壁基礎部分については、施設の構造上遺構の破壊が避けられないため、敷地 1,403 m²のうち、掘り方幅 2 m の基礎が敷設される敷地四周(延長 181 m)及び出入り口(長さ 8 m)の 378 m²について、平成 20 年度に発掘調査、平成 21 年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立し、福岡市東部農業協同組合と福岡市の間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。

調査期間は平成 20 年 10 月 20 日～平成 20 年 12 月 5 日で(調査番号 0845)、調査面積は 375 m²、遺物はコンテナ 74 箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては福岡市東部農業協同組合をはじめ、関係の皆様から発掘調査についてご理解を頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 福岡市東部農業協同組合

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文財課第 2 課長 田中壽夫

調査第 1 係長 杉山富雄

調査庶務 文化財管理課 古賀とも子

調査担当 調査第 2 係 長家伸

調査作業 岩本三重子 越智信孝 藤野幾志 桑野孝子 中島道夫 安部武代 安部ミユキ

酒井勝久 酒井兎美子 阿部ミエ子 室永温子 日田勝 井上義信 河野シズエ



写真 3 調査区全景(北から)

II. 遺跡の立地とこれまでの調査

蒲田部木原遺跡は福岡市東区の東端に位置し、若杉・三郡山地～宝満山および月限丘陵で画された粕屋平野に所在する。粕屋平野は福岡市・久山町・粕屋町・篠栗町・宇美町・須恵町の各自治体にまたがり、多々良川・宇美川・須恵川の營力による沖積平野と、山地から派生する台地で構成されている。また、河川が博多湾に注ぐ平野前面には砂丘が存在し、平野部との間には広大な後背湿地を形成している。

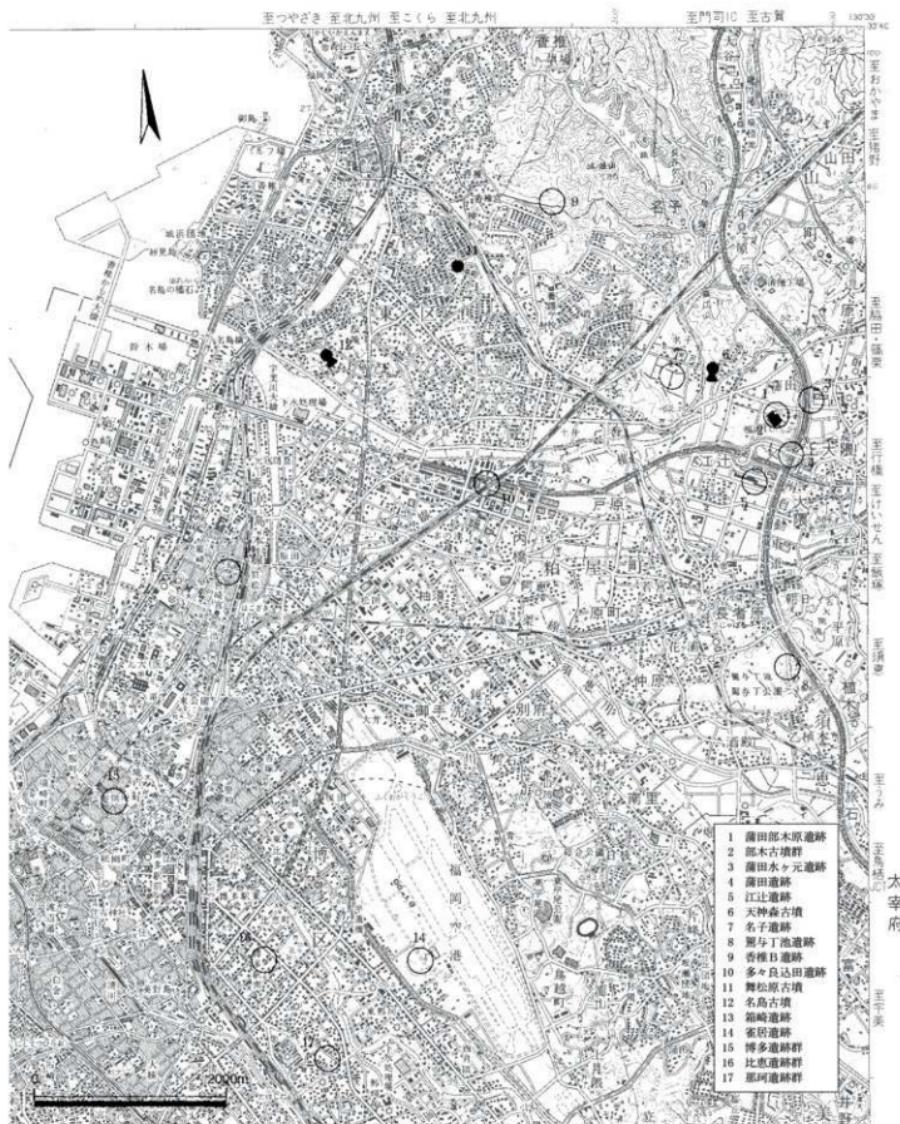
今回報告する蒲田部木原遺跡は三郡・若杉山地より西側に延びる台地の先端部分及び前面の沖積地に立地する大規模な遺跡である。台地部分は多々良川と猪野川に挟まれ、表層地質はASO-4を欠く中位段丘下位面構成疊層が露出しており、古墳時代前期の前方後方墳を含む部木古墳群が本遺跡の南側に位置している。また、現九州縦貫道の東側を中心として、本遺跡の東半部及び北側に隣接する蒲田水ヶ元（かまたみながもと）遺跡もこの段丘面上に立地し、同一の遺跡群を構成している。また前面の沖積地では主に安定したシルト層上面が遺構面となり、ここでも濃密な遺構群が展開する。

本遺跡の東側段丘面上では高速道路建設に伴う第1次調査において旧石器時代の遺物が確認されている。また圃場整備・施設建設に伴う2・3・6次調査では、弥生時代後期の堅穴住居跡、古墳時代後期の堅穴住居跡・掘立柱建物、古代の掘立柱建物、中世の館跡・埋葬遺構などを確認している。その北側の段丘面上に位置する蒲田水ヶ元遺跡では工場建設に伴い調査が行なわれており、弥生時代中期の甕棺墓群・後期の堅穴住居跡、方形周溝遺構、古墳時代～奈良時代の堅穴住居跡、掘立柱建物群等を検出している。また、これ以外にナイフ形石器、縄文時代前期轟・曾畠式土器片及び石鏃や方格規矩鏡破片が出土している。台地の西側には部木集落があり先端部には古墳時代前期と考えられる部木古墳群が展開している。なお、集落内で行われた8次調査においては弥生時代中期の甕棺墓・祭祀遺構が確認されている。

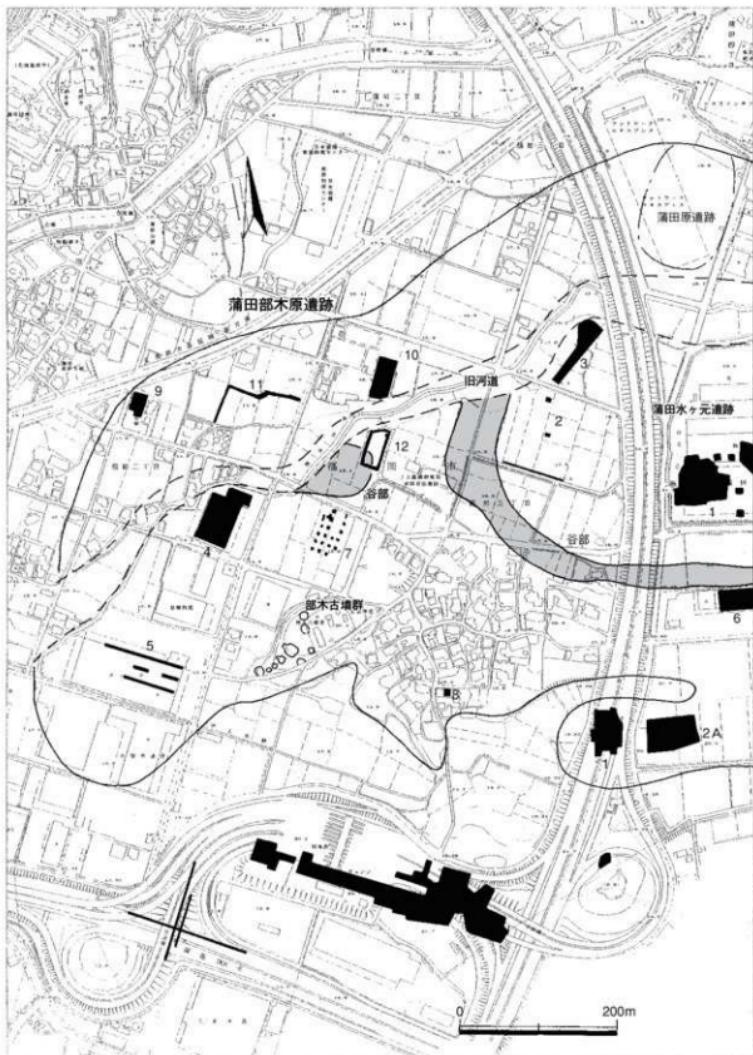
台地前面に展開する沖積地上では5・10・11次調査で縄文時代後晩期土器・石器が少量出土している。また、4・5・10・11次調査では弥生時代前期の明確な遺構が確認されるが、全体に検出の主体となるのは弥生時代前期末～後期であり、中でも中期後半が最も遺構・遺物が目立つ時期である。墓群としては7・11次調査で中期前半～中頃の甕棺を主体とした埋葬遺構群を確認している。古墳時代の遺構は比較的散漫となるが、4・10次調査で堅穴住居跡が確認されている。

蒲田水ヶ元遺跡では沖積地上で2・3次調査が行なわれている。2次調査では弥生時代中期～終末の堅穴住居跡・土坑を検出している。また、北側に隣接する3次調査においては、縄文時代後期の堅穴住居跡・土坑、弥生時代の甕棺墓31基、土坑墓38基、木棺墓21基、石棺墓2基を、弥生時代～古墳時代の堅穴住居跡は40棟以上を確認している。なお、古墳時代後期の土坑からは新羅土器が1点出土しており、注目される。

以上の調査成果を簡単にまとめると、旧石器・縄文時代の遺構・遺物は散発的に検出されていたが、近年、堅穴住居跡・土坑などの明確な遺構も確認されている。弥生時代前期には安定した生活の痕跡が認められるようになり、中期初頭～前半には生活域が一気に拡大していくものと考えられ、数箇所に甕棺・土坑墓・木棺墓等による墓群が形成されるようになる。その後、中期中頃～後半にかけてさらに規模の拡大が認められる。古墳時代前期には部木古墳群が築造されており、集落も引き続き確認され古墳時代後期まで継続している。また台地上では古代及び中世前半の遺構も確認されている。なお、奈良時代以降は沖積地上での遺構のあり方は非常に散漫となり、現在残る条里地割の痕跡等を考えると、この時期に生産域として開発されたものと考えられる。



第1図 調査区位置図 1 (1 / 50000)

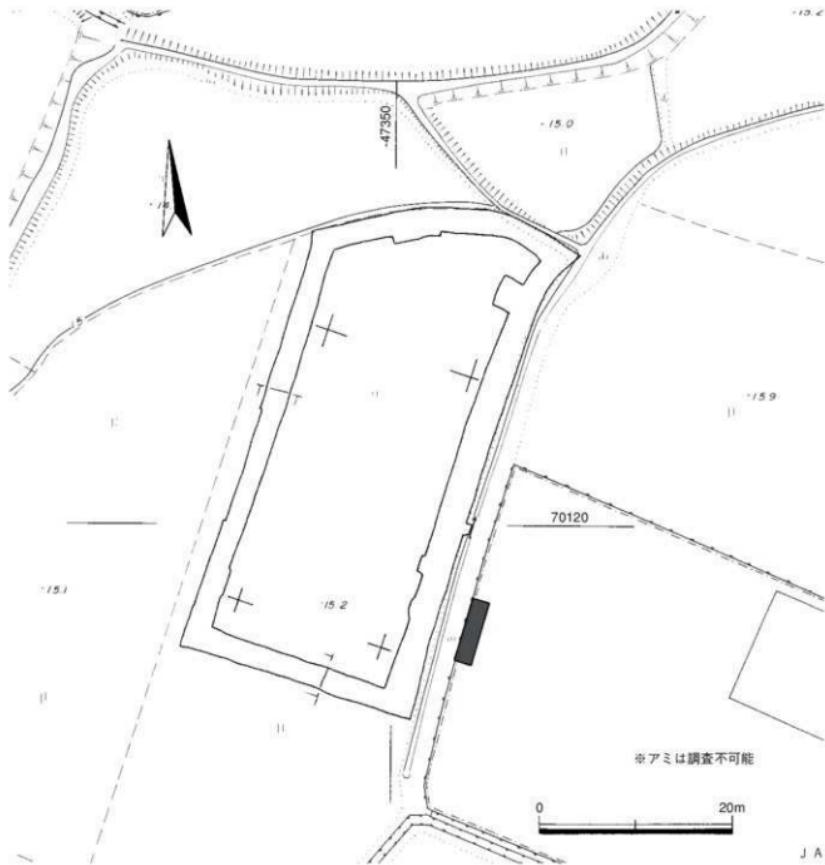


第2図 調査区位置図2 (1 / 6000)

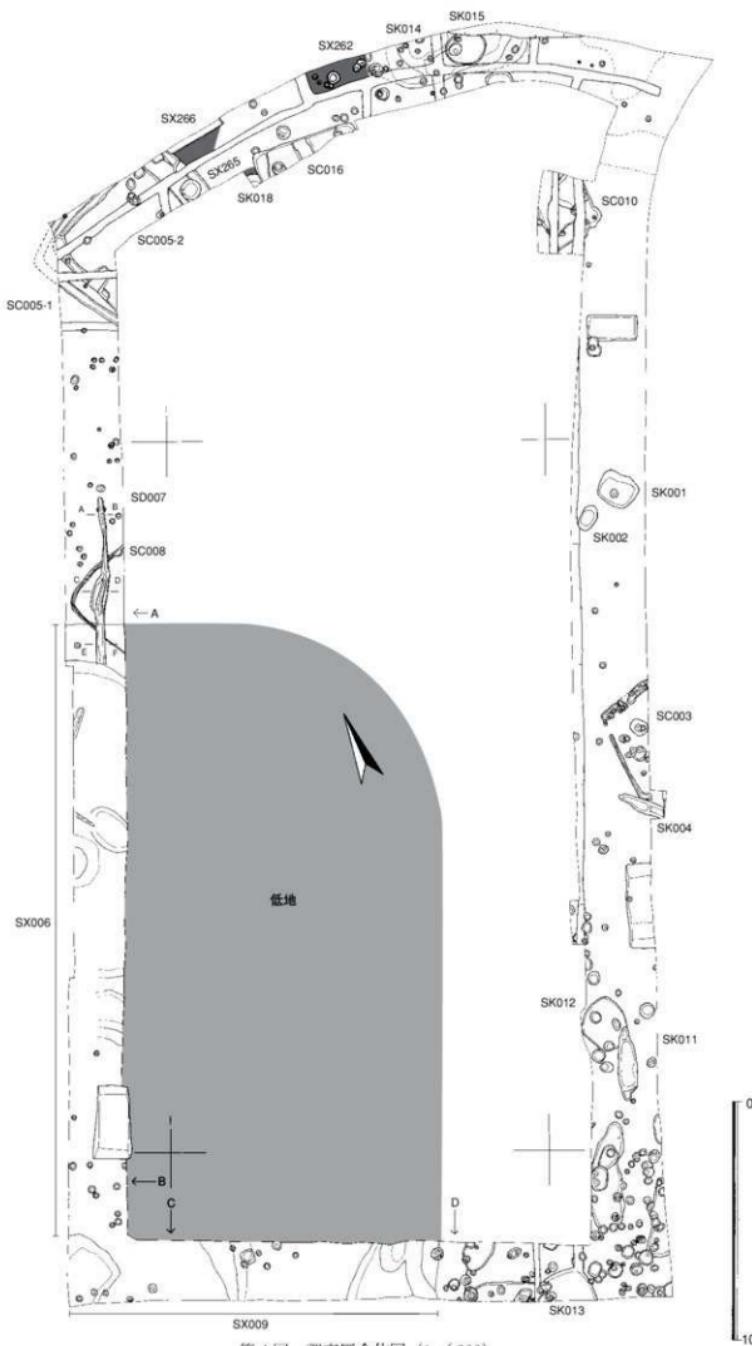
III. 調査の記録

1. 調査概要

今回調査対象となったのは、申請地 1,403 m²のうち造成に伴いコンクリート擁壁が設置される部分で、育苗施設として増設される現況水田の四周延長 181 m と現育苗施設との通路設置部分（長さ 8 m）である。基礎設置のための掘削予定幅は 2 m であり、調査対象面積は合わせて 378 m²となる。なお、通路設置部分（第3図アミ部）については、対象範囲に隣接して既存の用排水路があり、表土剥ぎ等による構造物毀損の可能性があり今回は調査を行うことができなかった。このため、現況水田周囲部分のみを調査することとした。



第3図 調査区位置図 3 (1 / 500)



第4図 調査区全体図 (1 / 200)

調査は重機による表土除去より開始した。水田面現況の標高は 15.1 m 前後を測る。遺構面は耕作土・床土を合わせて 30 cm ほど除去した後の水性堆積の明黄褐色シルト層上面である。遺構面の標高は 14.8 ~ 14.9 m で全体にはほぼ平坦となっているが、本来的には北東から南西方向に傾斜する沖積微高地を形成していたものと考えられ、後世の水田開発により平坦化されたものであろう。なお、現状の遺構面には一部下位の砂礫層が露出する部分があるが、全体には安定したシルト層が覆っている。また、調査区南西側には微高地にはさまれた低地部に弥生時代中期後半を主体とした包含層が形成されており、古墳時代中期までは埋没が完了し、その上面には堅穴住居跡が作られている。検出遺構には堅穴住居跡 6 棟、土坑 9 基、溝 1 条ほかピット等があり、出土遺物は弥生時代中期初頭～後半、古墳時代中期が主体となっている。なお、今回部分的に遺構面の明黄褐色シルト層（層厚 70 cm 程度）とその下位の砂礫層の掘り下げを行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

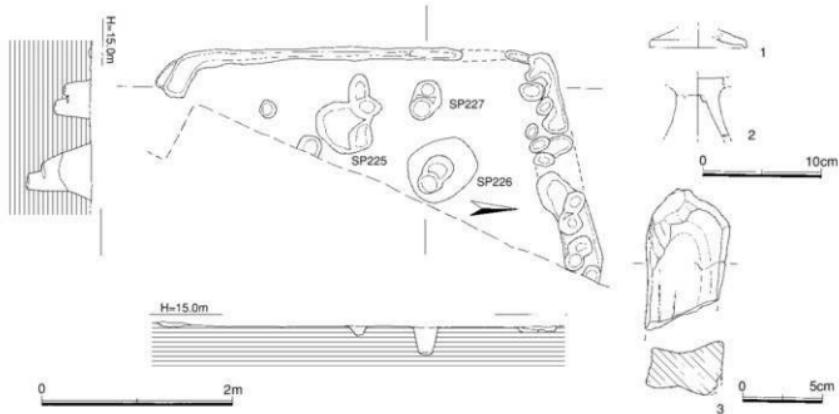
2. 遺構と遺物

1) 堅穴住居跡

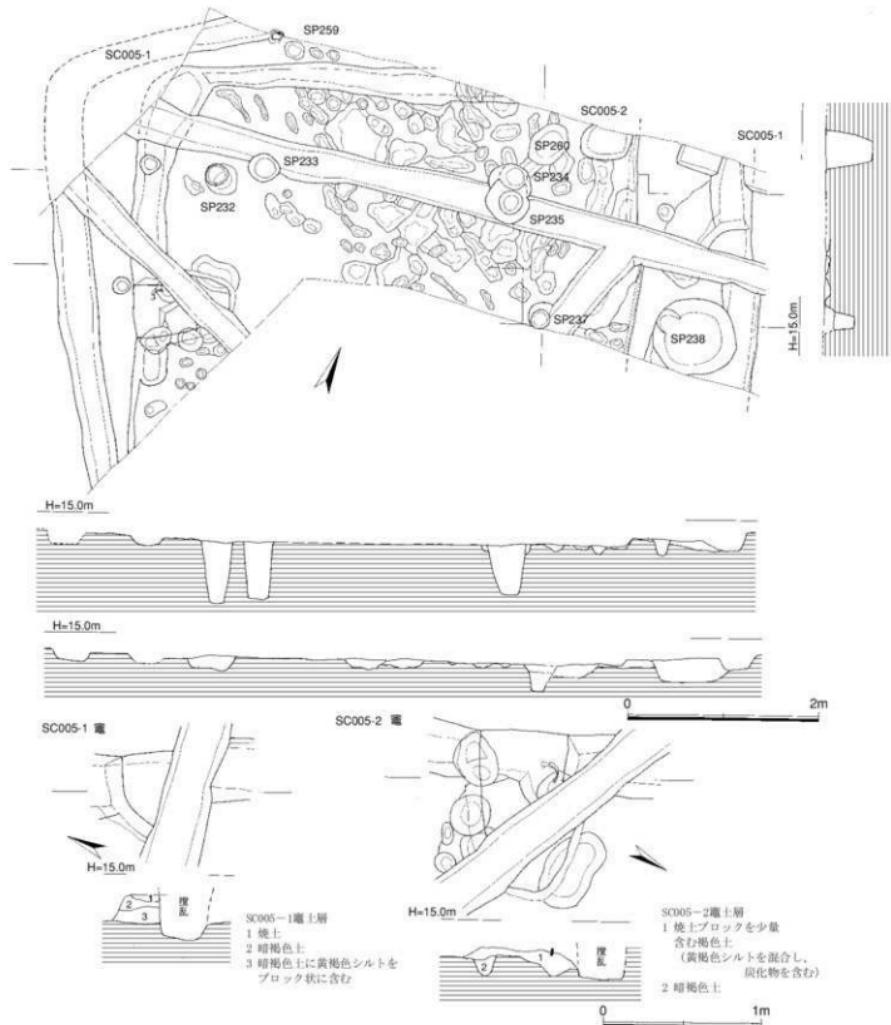
SC003 (第 5 図、写真 8・9)

調査区東側中央部で検出する。壁溝がわずかに残るのみであるが、南北長 4.5 m 前後を測る平面長方形の堅穴住居跡である。壁溝の埋土は黄褐色シルトをブロック状に含む暗褐色土で、西側では幅 15 ~ 20 cm、深さは 3 センチ程であるが、北側では掘削の工具痕跡と考えられる深さ 3 ~ 10 cm 程の凹凸が残っている。住居内の施設については明らかでないが、SP226 に主柱穴の可能性が考えられる。出土遺物は僅かであり、詳細な時期は不明瞭であるが、図示したもののはかに外面刷毛目、内面ヘラ削りを行った土師器小破片が出土していることや須恵器の出土が見られないことなどから、SC005・008 と同様の古墳時代中期に位置付けておきたい。

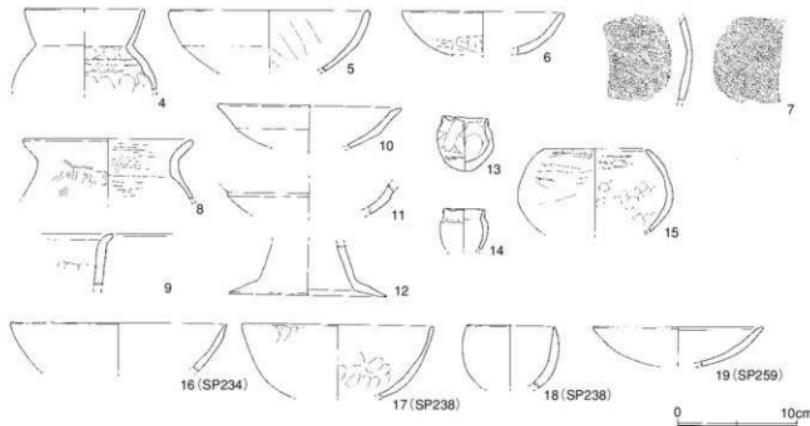
出土遺物 (第 5 図) 1・2 は SP226 出土である。1 は土師器の脚根部分破片である。端部は下方につまみ出し、玉縁状とする。2 は高杯の筒部である。短脚になるもので、摩滅が進んでいる。3 は砂岩製の砥石である。4 面を砥面とし、小口部分にも溝状の研磨痕が残る。



第 5 図 SC003 及び出土遺物実測図 (1 / 50、3 は 1 / 3、1・2 は 1 / 4)



第6図 SC005-1、SC005-2 実測図 (1/30、1/50)



第7図 SC005-1、SC005-2出土遺物実測図(1/4)

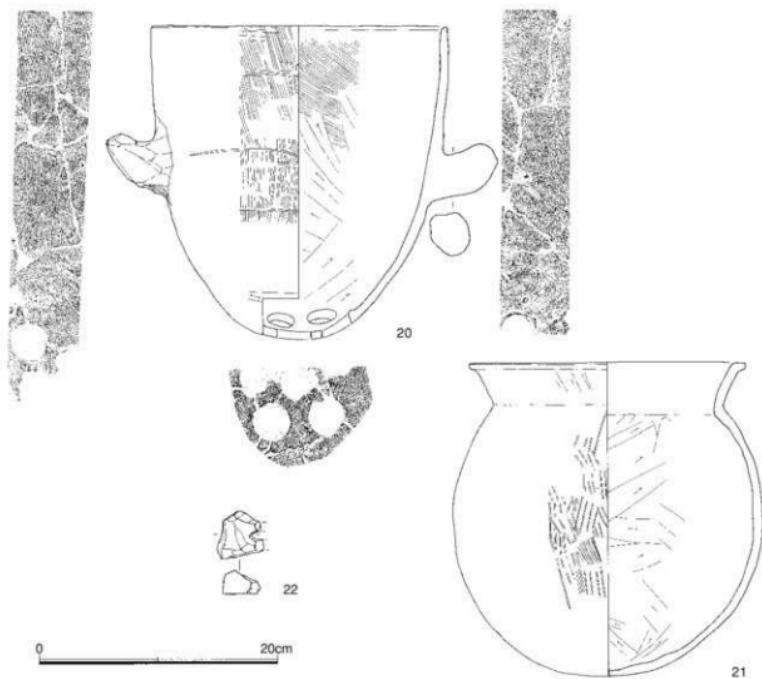
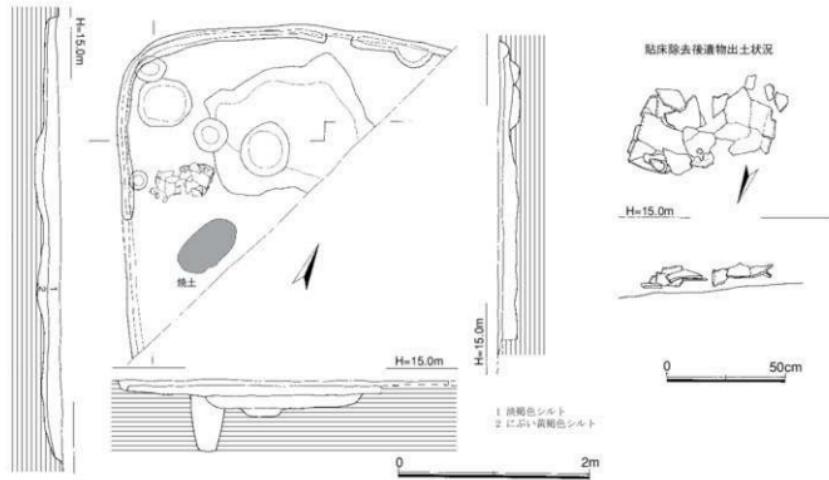
SC005-1・2(第6図、写真10~15)

調査区北側隅で検出した。当初東西長7.3mの平面(長)方形住居として掘り下げを行ったが、床面を検出した時点で内側にこれとほぼ並行する堅穴住居跡1棟を確認した。このため後で検出した住居を005-2、当初確認した住居を005-1とした。その後北壁土層を精査し、切り合い関係を確認したところ(第33図参照)、005-1→005-2の先後関係が明らかとなった。なお、出土遺物は切り合いで判明するまでは相互の混入が有り得るため005として取り上げを行っている。

005-2は東西長5.2m、検出面からの深さ15cmを測る。埋土は部分的に焼土・炭化物を含んだ淡い暗褐色土である。西壁へ北壁沿いに深さ5cm程の壁溝が残り、西壁には痕跡的ではあるが焼土ブロックを多く含んだ褐色土がまとまっており、壁体は確認できなかつたものの龕と認定した。主柱はSP233とSP234もしくはSP235を含む4本柱と考えられ、龕の位置から考えると、住居南北長は5m程度に復元できる。また、床面には暗褐色土と黄褐色シルトの混合土による貼床が行われるが、これを除去すると工具痕状の細かな凹凸が残っている。

005-1は005-2より主軸をやや西側に振るが、ほぼこれに重なり、一回り大きな規模を有する。東西長7.3m、検出面からの深さ5~8cmを測り、埋土は005-2にほぼ同じである。壁沿いには壁溝が巡り、東壁には龕の痕跡が認められる。主柱はSP232・260を含む4本柱が考えられ、これから復元すると南北長は6m前後であろうか。出土遺物より005-1・2いずれも時期的には近接しており、位置関係や埋土の類似から建て替えの可能性が考えられる。土師器甕・椀・高杯等が出土し、須恵器が出土しておらず、古墳時代中期に位置づけられる。

出土遺物(第7図) 4・5は005として取り上げたものである。4は甕の上半部で口縁部は内湾して上部に伸びている。胴部内面には粘土の接合痕が残り、全体に指押さえを行っている。5は椀である。色調は暗橙色を呈し、胎土は精選された精良なものである。外面調整は不明であるが、内面には縱方向の指ナデの痕跡が残る。6・7はSC005-1の出土である。6は甕の破片である。外面下半にはヘラ削りを行っている。7は甕の胴部であろうか。外面には刷毛目、内面はヘラ削りを行う。8



第8図 SC008 及び出土遺物実測図 (1／20、1／50、1／4)

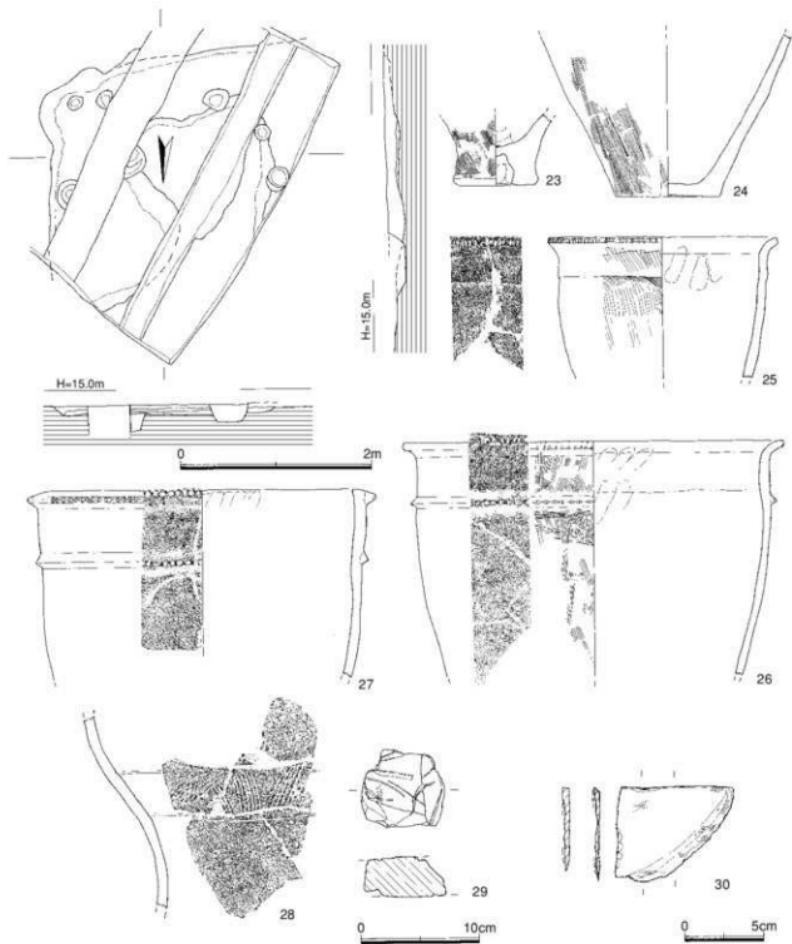
～15はSC005-2からの出土遺物である。8は甕である。口縁部は屈曲部位より外反する。外面は頸部以下に縱刷毛を行い、小口痕跡も残している。内面は胴部より頸部屈曲部位までは横方向のヘラ削りを行い、口縁部内面には横刷毛が認められる。9は口縁端部を外側に屈曲させる、瓶の口縁部であろう。胎土には径2～4mmの砂粒を多く含み、外面は2次的な被熱の痕跡が残る。10～12は高杯である。胎土は精良で、橙色を呈する。杯部外面には明瞭な段を有し、脚部内面には横方向のヘラ削りを行う。13・14はミニチュアの甕である。13はほぼ完形に復元でき、北側周溝内から出土している。15は竈上面から出土した瓶である。胎土は比較的精良で明赤褐色を呈する。外面は手持ちの横ヘラ削りを行い、内面は上半部にヘラ状工具による磨き状のナデを行い、下半部には指頭痕が残る。16～19はピット出土遺物である。いずれも碗である。16は橙色を呈し、胎土は水漉しされた精良なものである。

SC008(第8図、写真16～18) 調査区西側中央部に位置し、隅丸方形を呈する住居跡の半分を検出した。SX006→SC008→SD007の先後関係となる。埋土は淡褐色シルトで、北壁～西壁にかけて幅10cm、深さ5cm程の壁溝を確認する。床面には主柱穴、竈、炉跡等の施設は認められない。なお、床面にはにぶい黄褐色シルトによる貼床が行われており、これを除去する過程で焼土・炭化物のまとまりが認められ、この掘り方底面付近で、土師器甕と瓶が1個体づつ出土した。堅穴住居構築にかかる遺物と考えられ、焼土・炭化物の存在より、堅穴掘削直後に煮炊を行った可能性を考えられ、住居建築に伴う行為の痕跡と想定できる。出土遺物はコンテナ2箱出土しているが、小破片が大半である。貼床出土の甕・瓶のほかにも土師器甕小破片が出土しているが、須恵器は認められない。古墳時代中期に位置付けられる。

出土遺物(第8図) 20・21は貼床除去後に検出した瓶と甕である。20はほぼ完形に復元できる多孔式の瓶である。砲弾形の胴部から口縁端部まで直線的に立ち上がり、底部には6孔を有する。把手は2箇所に貼付けられ、整形は指押さえによる。調整は胴部外面上半には縱刷毛、下半にはヘラ削りを行う。外面中央付近には把手から把手までの間に1条の沈線が残っている。また、内上面部には斜方向の刷毛目、以下はヘラ削りを行う。21は1/2ほどが復元できる甕である。胴部は球形を呈し、外面上半は粗い刷毛目、底部付近はヘラ状工具によるナデを行う。内面は頸部屈曲部まで全面にヘラ削りを施している。口縁は上端部を水平に整え、外端を外方に引き出している。22は用途不明の土製品である。胎土は水漉しの精選されたもので、外面橙色、胎土内面は暗灰黄色を呈する。現状で破損部位が多く形状不明であるが、厚さ2cm強を測る。また、径7mm程度の孔が残存している。

SC010(第9図、写真19) 調査区北西部で検出した。東側にコーナーを確認したため、西側を部分的に拡張して調査を行った。埋土は焼土・炭化物を含む暗褐色土で、黄褐色シルトがブロック状に混入している。(長)方形の堅穴と考えられるが、底面には緩やかな凹凸が多く存在し、明確な床面は不明である。また、主柱穴・炉跡等も確認していない。弥生時代前期後半～中期初頭の甕、壺とともに石包丁、黒曜石剥片、壁体状の焼土塊などが出土している。

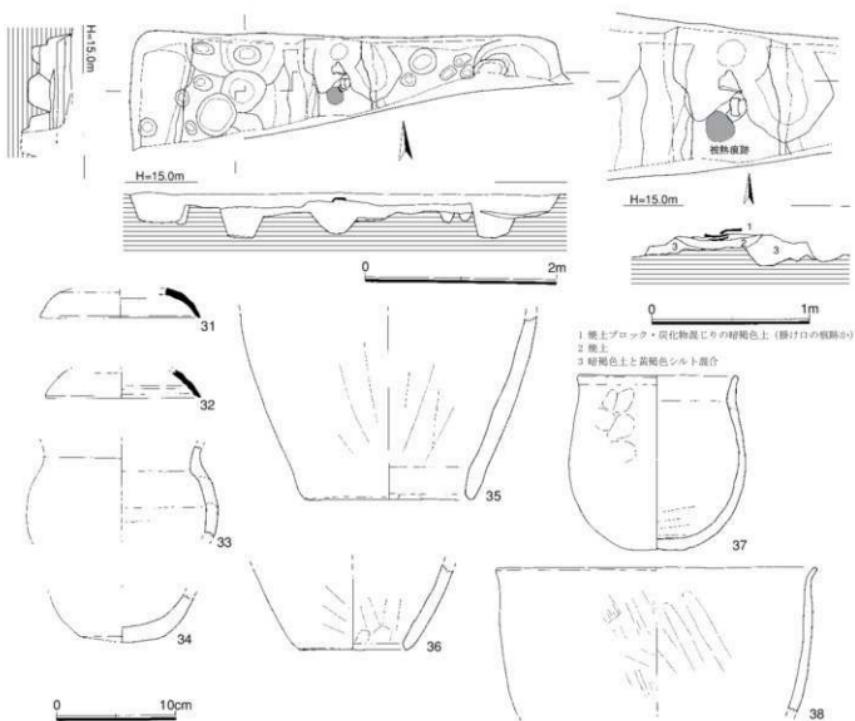
出土遺物(第9図) 23～27は甕である。23は上げ底の底部に外面刷毛目を施している。24は平底で外面は縱方向の刷毛目～ヘラナデを行なう。25・26は下端部に刻みを有する如意状口縁を呈する。25は外面に段を有し、調整は外面縱刷毛～ヘラナデ、口縁部内面は横刷毛、以下はナデによる。26は刻目を施した突帯を巡らせている。27は口縁部断面三角形を呈し、口縁部及び胴部に刻目突帯を貼付している。外面調整は幅広の刷毛目を施している。28は貝殻施文による重弧文を刻む壺である。外面はヘラ磨きを行う。29は厚さ3.5cmの壁体状焼土塊である。橙色を呈し、水漉し胎土にスサを混入している。団上の上下両面は平坦面をなし、直線的な形状を呈している。30は背面が剥離した、真岩製の外湾刃半月形の石包丁破片である。



第9図 SC010 及び出土遺物実測図 (1／50、30は1／3、その他は1／4)

SC016 (第10図、写真20～23) 調査区北側中央部で検出した。北壁及び東西壁の一部を確認したのみで、大半は調査区外に伸びている。埋土は暗褐色土で、床面には褐色土に黄褐色シルトブロックを混合した貼床が行われている。

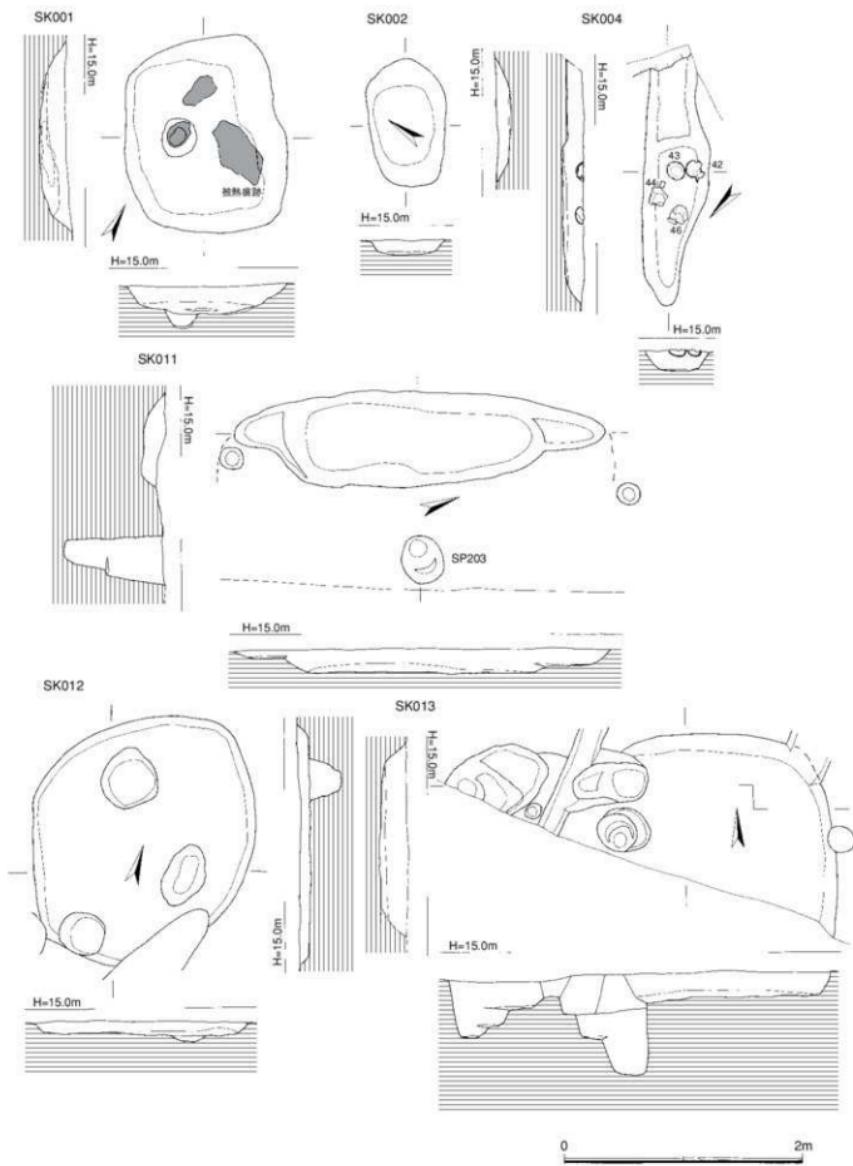
竪穴の東西長4.5mを測り、北壁中央部分には竪を設置している。竪は検出状況では形状不明であつ



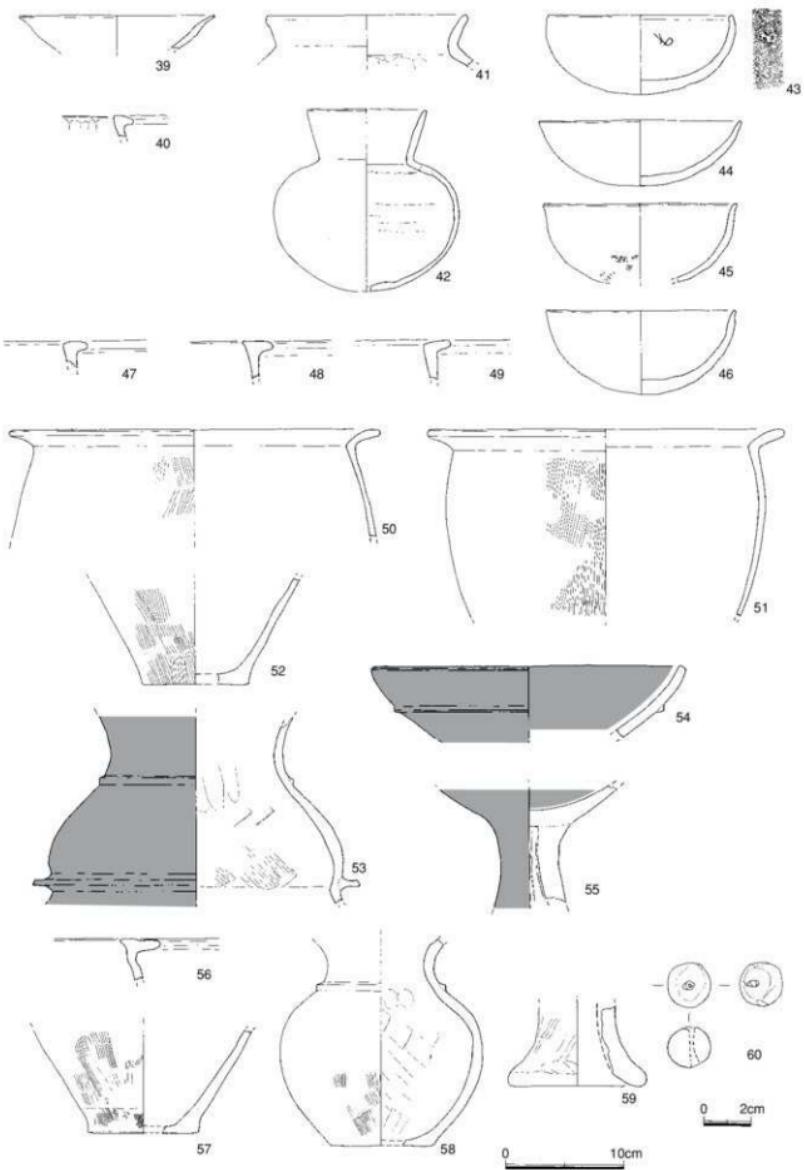
第10図 SC016及び出土遺物実測図 (1／30、1／50、1／4)

たが、縦口床面に被熱痕跡が残り、断面形状から両袖部と中央の掛け口が復元できる。土師器壺、甌・椀のほか、須恵器破片が2点出土している。古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第10図） 31は須恵器壺蓋である。天井部外面には回転ヘラ削りを行う。32は酸化焼成であるが、製作技法は須恵器の壺蓋である。橙色を呈し、胎土は精良で石英微砂粒を含む。33・34は甌である。共に器壁は厚く、内外面はナデを行い、底部外面にはヘラ削りを施している。35・36は底部がつつぬけとなる甌である。共に外面ヘラ削り、内面指ナデが残る。37・38は甌出土である。37は全体の1／2が残存しており、甌上面から出土したものである。外面は2次的焼成により赤褐色化しており、甌での使用を想定することができる。38は甌上部である。外面縦刷毛ヘラナデ、内面指ナデの痕跡が残る。



第11図 SK001・002・004・011・012・013 実測図 (1 / 40)



第12図 SK001・002・004・011・012・013出土遺物実測図 (60は1/2、その他は1/4)

2) 土坑

SK001 (第 11 図、写真 24)

調査区東側中央部で検出した。長軸 1.6 m、短軸 1.4 m、検出面からの深さ 20cm ほどを測る、平面隅丸長方形を呈する土坑である。埋土はわずかに炭化物・焼土を含んだ淡褐色土である。底面は中央部分に向かって緩やかにくぼみ、中央にピット状の掘りこみを有する。底面に 3ヶ所暗赤褐色を呈する被熱痕跡が認められるが、還元化するには至っていない。土師器小破片が出土するが、須恵器は含まれていない。

出土遺物 (第 12 図、39) 39 は椀の破片である。橙色を呈し、胎土は水漉した精良なものである。器面は剥落が進み調整等は不明である。

SK002 (第 11 図、写真 25)

調査区東側中央部で検出した。長軸 1.1 m、短軸 60cm、検出面からの深さは 10cm 程度である。壁は両小口側が傾斜をし、長軸方向は直立に近い。埋土は淡褐色土である。小破片のみがわずかに出土するのみで明確な時期は不明であるが、弥生時代中期に位置付けられる破片が主体となる。

出土遺物 (第 12 図、40) 壺の口縁部破片である。端部に粘土帯を貼付し、断面形状は逆 L 字形となる。胎土には石英微砂粒を含み、灰褐色を呈する。

SK004 (第 11 図、写真 26・27)

調査区東側で検出し、SC003 を切る溝状土坑である。現状で長さ 2.1 m を確認しているが、東側にさらに伸びていく。断面形は逆台形に近く、底面は平坦となっている。また、底面は西側が一段深くなり、この部分に底面から浮いた状態で壺・甕が据えられていた。削平により失われた部分も多いが、本来は完形品を据えたものと考えられる。埋土は暗褐色土である。土師器壺・甕・甕が出土しているが、須恵器は含まれていない。古墳時代中期に位置付けられる。

出土遺物 (第 12 図、41 ~ 46) 41 は甕の口縁部である。淡黄橙色を呈し、胎土には径 3mm 程度の石英砂粒を多く含んでいる。外面及び口縁部内面の調整はナデによるが、内面屈曲部以下には指頭痕が残る。42 は直口壺で水漉した胎土を使用し、橙色を呈する。横置されていたため、削平により全体の 1/2 を完全に失っている。器面の剥落により調整は不明瞭であるが、外面上半は横ナデ、下半はヘラ削りの痕跡が認められる。また、胴部内面はヘラ削りにより器壁を薄く作り上げている。43 ~ 46 は甕である。橙色を呈し、胎土は精良であるが、45 以外はやや厚手のつくりである。45 は内面にヘラ状工具により記号状の刻みが施されている。形状は口縁端部までやや内湾して納めるもの(43)と、端部を外反させるもの(45・46)と端部直下をわずかにくぼませて外反気味となるが、ほぼ直線的に開いて納めるもの(44)がある。

SK011 (第 11 図、写真 28)

調査区東側南部で検出す。長軸 3.1 m を測り、両端部には浅い段を有する。埋土は黄褐色シルトをブロック状に含む暗褐色土である。大きな削平を受けており、本来の形状は不明であるが、SP203 を主柱とした竪穴住居跡の可能性も考えられる。遺物には甕・壺の小破片と黒曜石剥片があり、弥生時代中期前半代の遺構であろう。

出土遺物 (第 12 図、47 ~ 49) いずれも逆 L 字形を呈する甕の口縁部破片である。胎土には石英砂粒を多く含み 48・49 は 2 次的な被熱により、赤褐色化している。

SK012 (第 11 図、写真 29)

調査区東側南部で検出し、SK011 に切られている。一辺 2 m のやや歪な隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは 10cm 程である。底面はほぼフラットであり、東側に深さ 5 cm ほどの窪みが残る。なお、

西半部の2基のピットは本土坑を切る遺構で、伴うものではない。弥生時代中期後半を主体とした壺、壺、高坏等とともに黒曜石剥片が出土している。

出土遺物（第12図、50～55） 50～52は壺である。口縁部は外面は縱刷毛、内面はナデによる調整を行う。53は瓢形土器である。外面の丹塗りは剥落が進んでおり、痕跡的に残るのみである。調整は不明瞭であるが、内面の接合部に刷毛目が残っている。54・55は高坏である。接合部位はないが同一個体の可能性がある。剥落しているが坏部内外面・筒部外面には丹塗りが施される。坏部は口縁端部上面を横ナデにより崖ませ、外面に一条の断面三角形突帯を貼付する。

SK013（第11図）

調査区南側東部で検出する。埋土は灰味を帯びたシルト質の褐色土で、焼土・炭化物は含まない。底面で検出したピット状の掘り込みの周辺とは明らかに異なる同様の埋土であるため、一連の遺構と考えられる。南側が未調査のため詳細は不明であるが、隅丸（長）方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは25cm程を測り、底面は平坦である。遺物はコンテナ1箱出土しているが、大半は弥生時代中期後半の壺・壺・器台等の小破片である。このほか黒曜石片が出土している。

出土遺物（第12図、56～60） 56・57は壺である。口縁部は彌形を呈し、底部は平底である。58は壺である。頸部に一条の突帯を有し、底部は平底である。胴部外面下半には縱刷毛を行い、胴部内面はヘラ状工具による斜め方向のナデ、屈曲部には指ナデ痕跡が残る。59は器台である。赤褐色を呈し、外面には縱方向の刷毛目が残る。60は穿孔を有する土製玉である。

SK014（第13図、写真30）

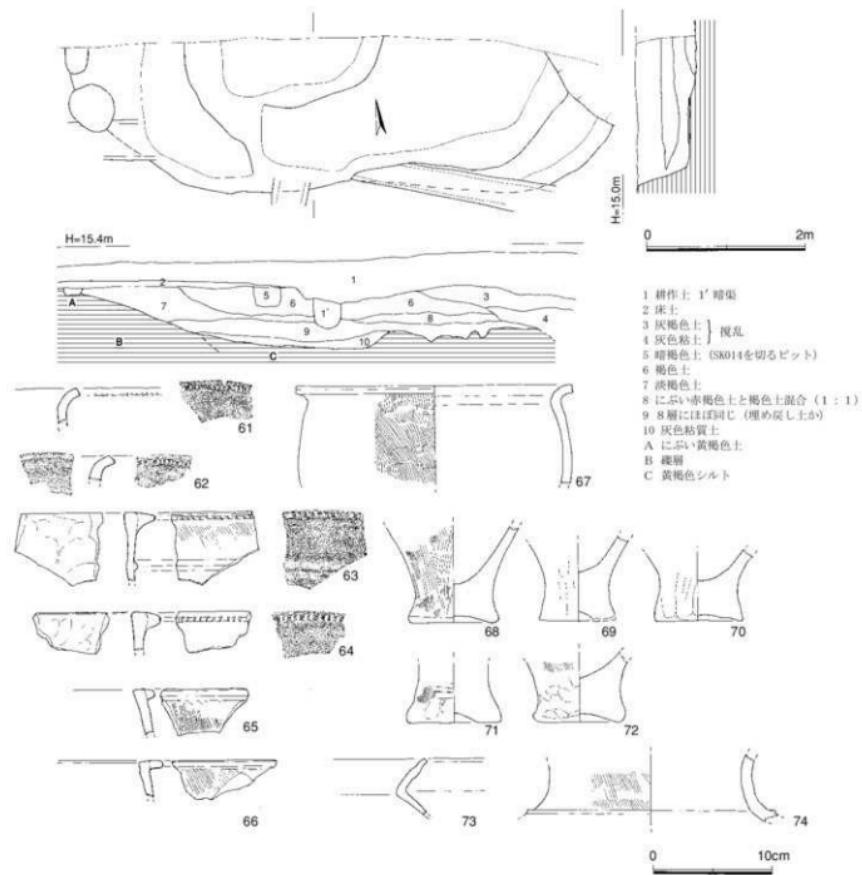
調査区北側で検出し、SK015に切られる。大型の土坑で、調査区内で幅7mを測る。埋土上面は褐色土で、中位に人為的な埋め戻しを想定させる混合土、最下層に滲水をあらわす粘質土が堆積している。壁は緩やかに傾斜し、東側底面には細かな凹凸が残っている。機能は不明であるが水溜を行った可能性も考えられる。弥生時代前期～古墳時代前期までの遺物が出土しているが、上面の遺構の遺物が混入した可能性が高く、主体を占める中期前半代の遺構と考えておきたい。遺物には土器片ほかに黒曜石剥片、焼土塊が認められる。

出土遺物（第13図・写真4・5） 61・62・67は如意形口縁の壺である。61・62の口縁部下端には刻みを有する。67は外面に縱刷毛を行い、62・67口縁部内面には横方向の刷毛目が残る。63～66は外面に粘土帯を貼付し、逆L字型の口縁となる。63・64には口縁端部外面に刻みを有する。63は断面三角形の突帯を貼付し、63・65・66外面には縱刷毛を施す。68～72はいずれも厚い上げ底の底部である。外面の調整はヘラ状工具により、刷毛目が残るもの（68・71・72）、ナデを行うもの（69・70）がある。73・74は混入と考えられるものである。73は布留式壺の口縁部、74は広口壺の口縁部である。写真は焼土塊である。暗褐色を呈し、最大で5cm角の塊状となっている。胎土は精選されており、砂粒はほとんど認められない。スサを少量混入しているようである。

SK015（第14図）

調査区北側で検出し、SK014上面から掘り込んでいる。1.7×1.4mの平面長円形を呈し、検出面からの深さは5cmほどである。底面は中央部がやや崖むが、全体に平滑である。埋土は黒褐色土に黄褐色土をブロック状に混合する。遺物は小破片がコンテナ1箱分出土しており、弥生土器が主体となっているが、土師器も出土しており、古墳時代以降のものと考えられる。なお、須恵器は認められない。

出土遺物（第14図、75） 土師器の瓶腹部である。浅黄褐色を呈し、角状の把手を有する。調整は外面縱刷毛、内面縱方向のヘラ削りを行う。



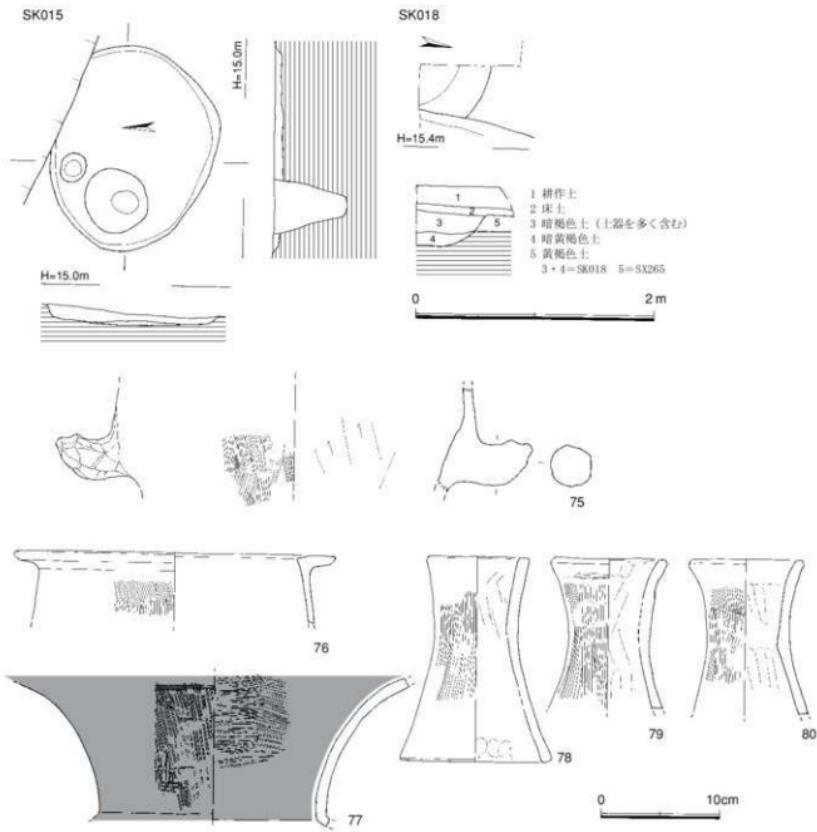
第13図 SK014 及び出土遺物実測図 (1 / 60、1 / 4)



写真4 SK014 出土焼土塊 1



写真5 SK014 出土焼土塊 2

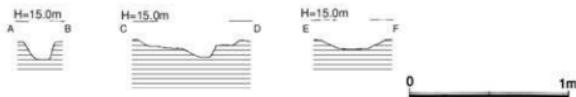


第14図 SK015・018及び出土遺物実測図(1/40, 1/4)

SK018 (第14図、写真31)

調査区北側で検出し、SC016に切られる。円形土坑の一部と考えられるが、調査区外に大半が延びるため、詳細は不明である。検出面からの深さは30cm程度で、底面は平坦である。遺物はコンテナ1箱分出土しており、弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第14図、76~80) 76は鋤状口縁部を呈する甕である。外面には縱刷毛を行う。77は丹塗りの広口壺である。外面は縱方向のミガキ、内面は横方向のミガキを行う。78~80は器台である。調整はいずれも外面は縱方向の刷毛目、内面は指ナデを行う。



第15図 SD007 断面図 (1 / 30)

3) 溝

SD007 (第15図)

調査区西側で検出し、SC008を切る。また、本来は低地部が埋没した後に掘削されており、更に南に伸びるものであるが、調査時には確認できていない。幅は40cm、検出面からの深さ10cm程度を測る。埋土は淡褐色土である。遺物は少量で小破片のみであり、時期は不明であるが、切り合い関係より古墳時代中期以降である。

4) 包含層

SX006・009 (第16図、写真32~34)

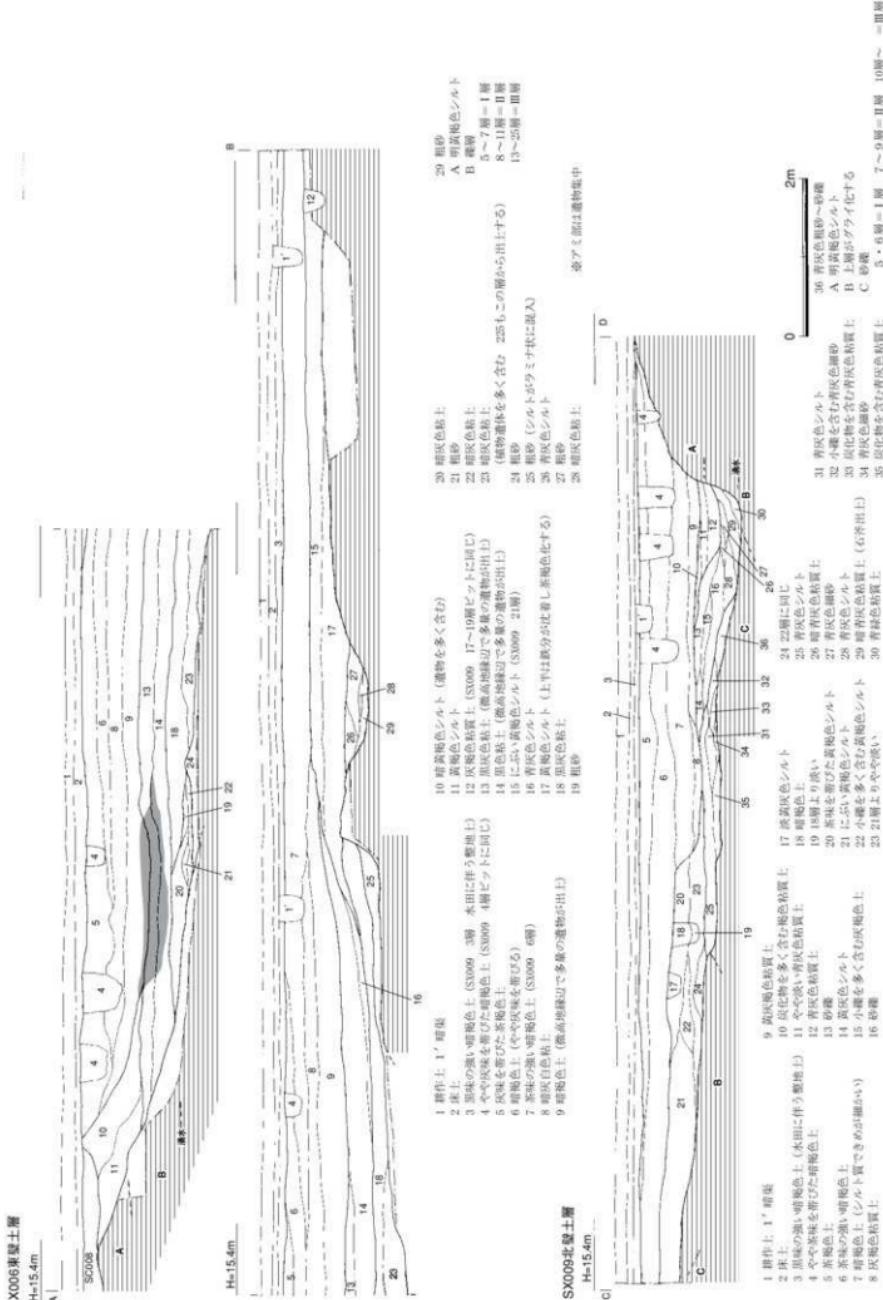
調査区北側中央部と南側中央部に微高地より低地に至る傾斜面を確認した。調査区の制約より不明瞭な点もあるが、調査区東側及び北側はいずれも安定した明黄褐色シルト層が確認されていることから、申請地南西部には低地が広がっていると考えられる。

低地部の調査は西側調査区をSX006、南側調査区をSX009と遺構番号をつけて行った。SX006は比較的緩やかな斜面をなし、底面付近からは礫層が露出している。堆積層は大きく3層に分けることができ、いずれも基本的には水平堆積をなしている。最上層のI層は水田土・床土・暗褐色整地土の下層に堆積している。I層上面からはピットが掘りこまれておらず、最終的には古墳時代の住居跡であるSC008がこの上面に乗っている。II・III層は遺物を多量に包含する黒(灰)色土(13・14層)を鍵層として、これ以下をIII層、この上層をII層としたが、13層直上の9層からも連続して多量の遺物が出土し、結果的にII・III層は明確に分別して土器を取り上げることができなかった。また、湿地状の堆積を示す13・14層以下には流水による粗砂層とシルト・粘質土が互層上に堆積しているが、激しい湧水により標高13.6m以下は掘削できていない。なお、III層上面においてもピットを検出しておらず、安定した状況を知ることができる。また、II・III層出土遺物はおおよそ、傾斜開始地点から3~6mほどの微高地に近い部分から多量に出土し、これより離れると遺物の出土量は極端に散漫となる。集落域からの投棄と考えられ、完形に復元できるものはない。SX009も基本の堆積状況はSX006と同様である。傾斜面はSX006より急となっており、III層に対応する堆積層はSX006より安定的でなく、流水を想定させるものであり、微高地付近の安定した溝水層や多量の遺物投棄は認められなかった。

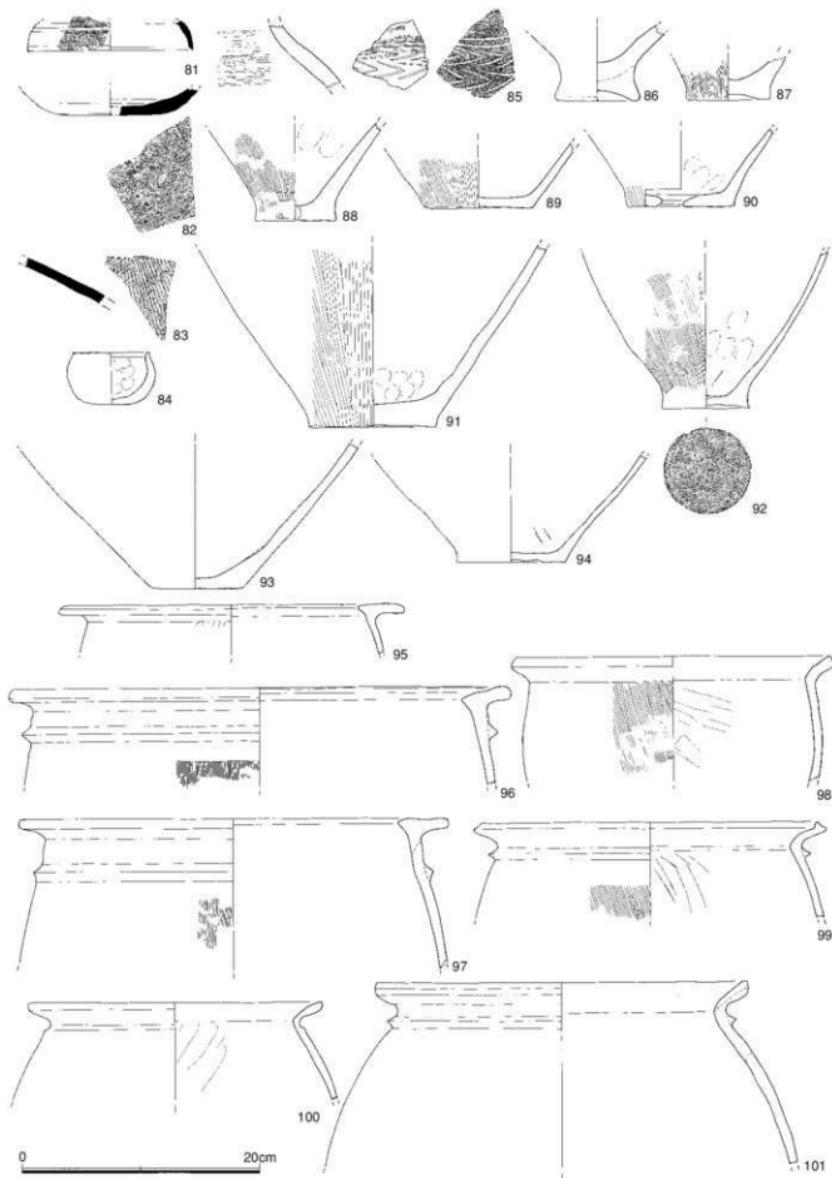
出土遺物はSX006で取り上げたものがコンテナ128箱、SX009は12箱である。

SX006出土遺物の大半はIII層のもので、II層からは30箱前後出土している。I層からは須恵器破片が数点出土しており、この他の弥生時代中期後半に位置付けられる遺物が出土しているが、ほとんどである。II・III層からはわずかに弥生時代前期に位置付けられる遺物が出土しているが、大半は弥生時代中期後半～末に位置付けられる。なお、I層出土須恵器については、出土量が少量であることや、須恵器を含まないSC008がI層上面から掘りこまれていることなどから、ピット等の遺構に伴う遺物である可能性が考えられる。

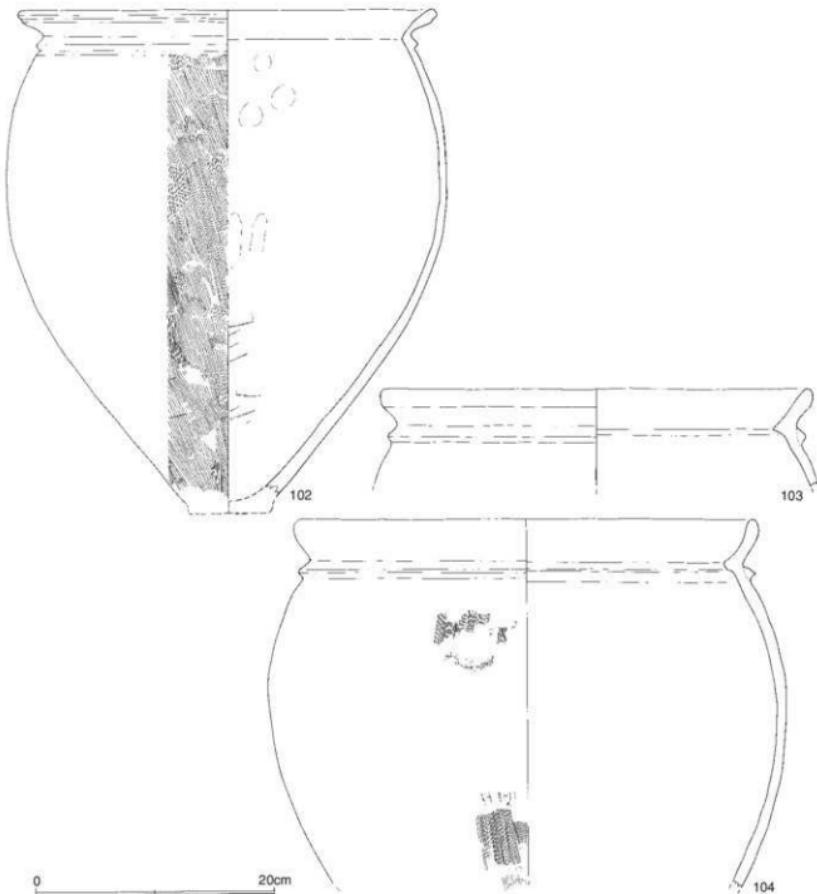
SX009ではI~III層まで時期差は認められなかった。弥生時代前期末～中期末の甕・壺破片が主体



第16図 SX006・009 土層断面図 (1/60)

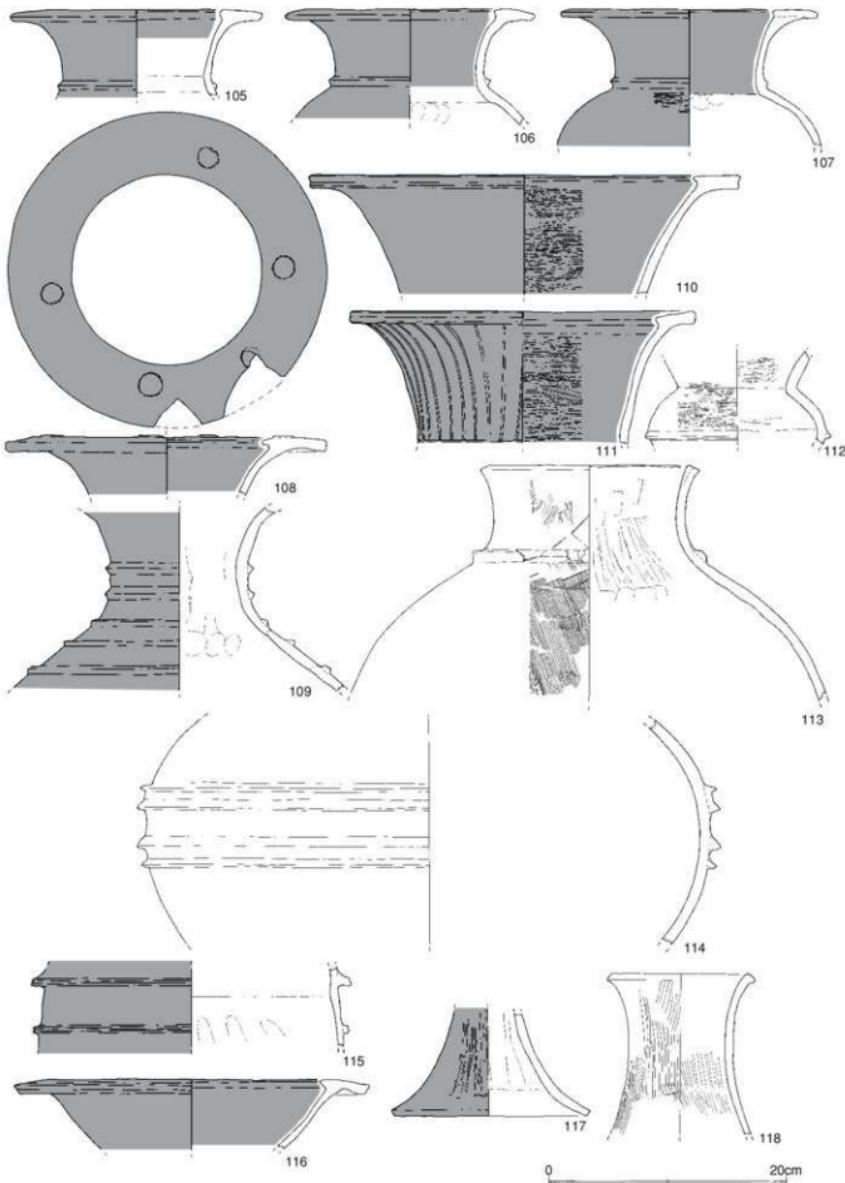


第17図 SX006出土遺物実測図1 (1/4)

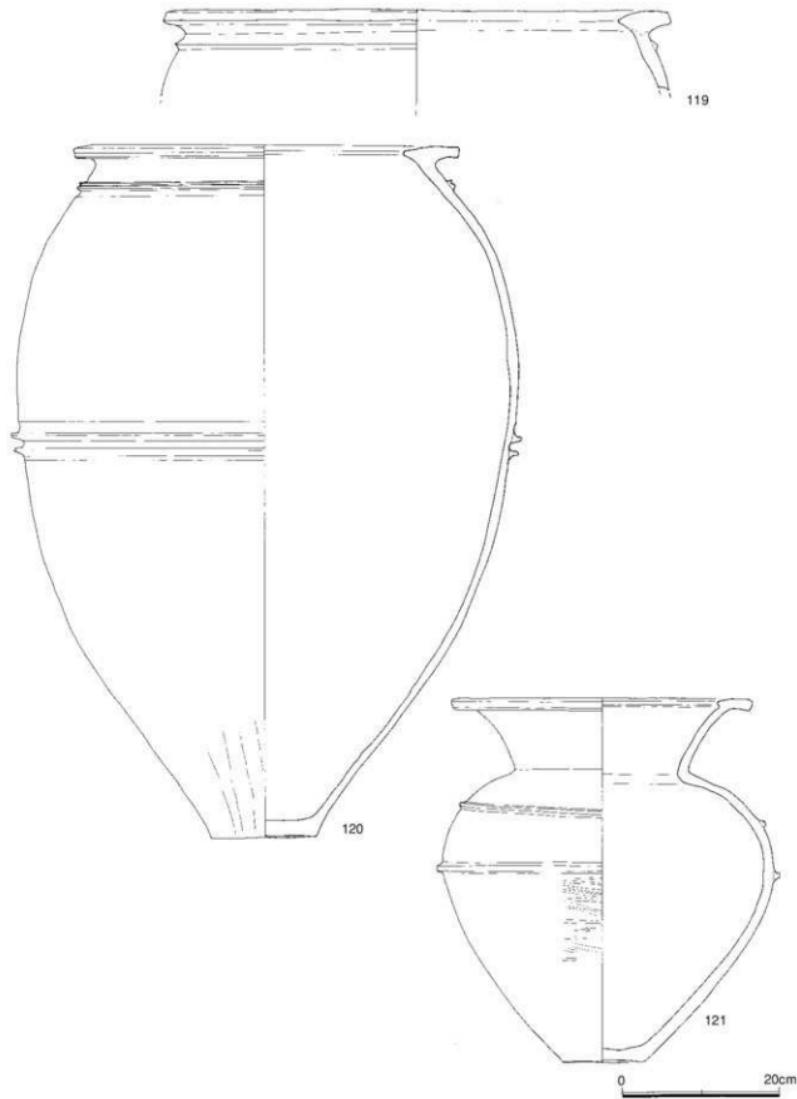


第18図 SX006出土遺物実測図2 (1/4)

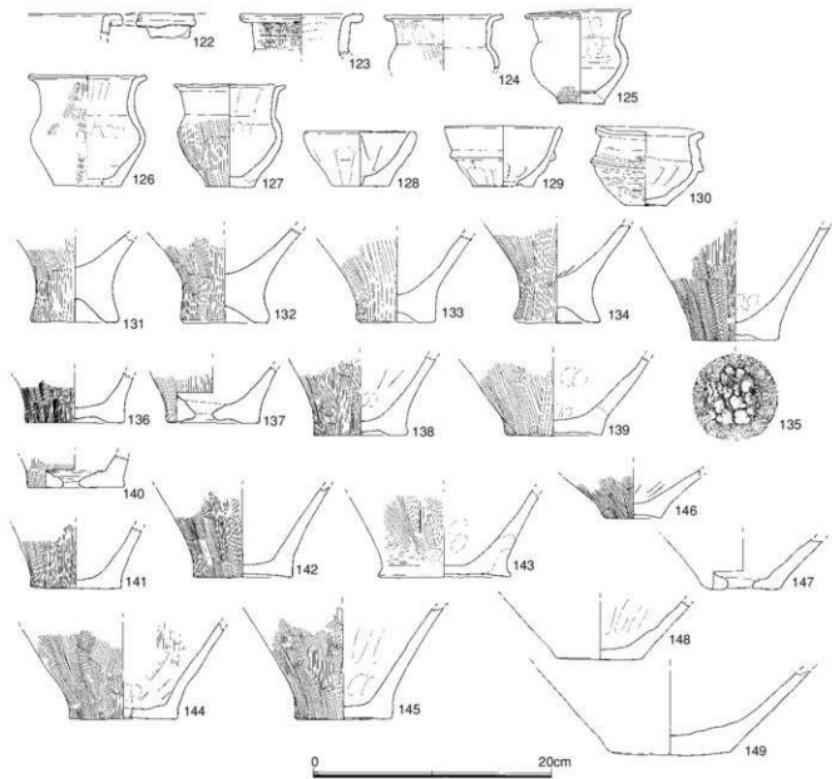
となり、一部にはSX006出土資料と接合したものもある。これらの出土遺物や遺構のあり方から、II・III層は微高地に大規模な集落が形成された弥生時代中期後半～末に埋没したものであり、その後生活遺構が一時期衰退する古墳時代前期にかけて穏やかな埋没が進んだものと考えられる。最終的には埋没後の古墳時代中期になるとSC008に見られるような堅穴住居跡も作られるようになり、埋没土上面にも生活遺構が展開するようになる。



第19図 SX006出土遺物実測図3 (1/4)

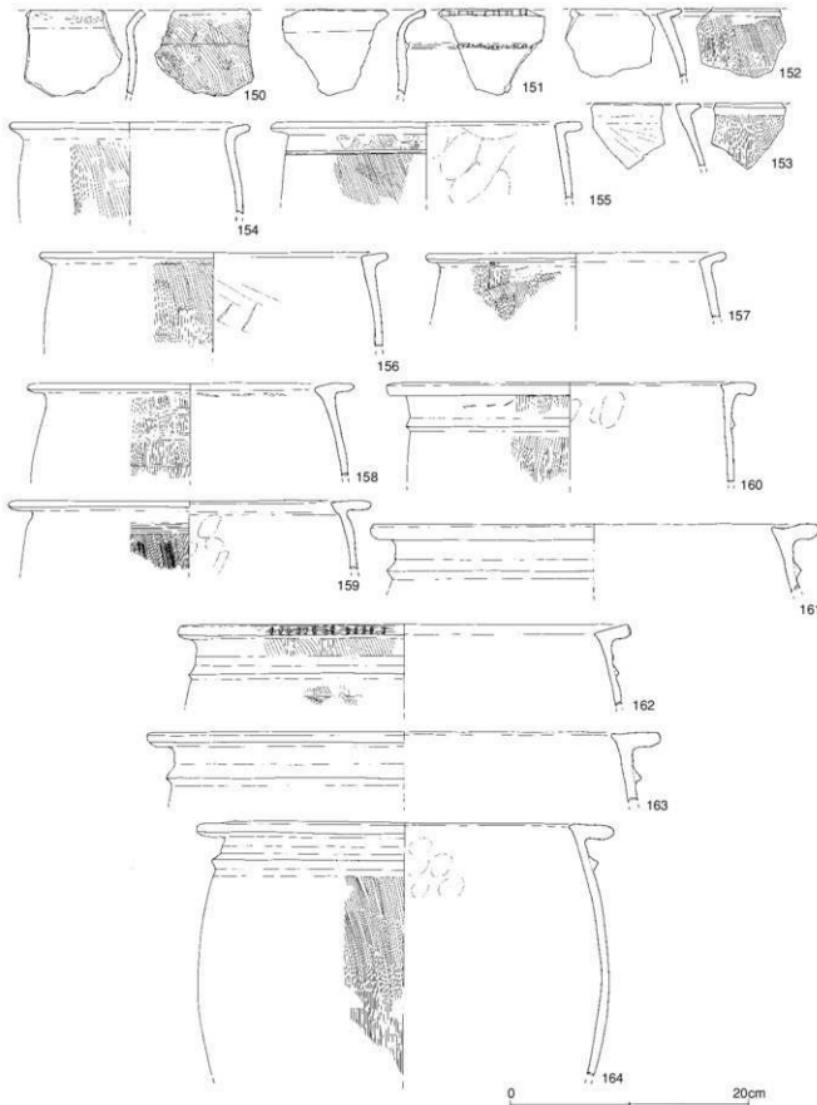


第20図 SX006出土遺物実測図4 (1/6)

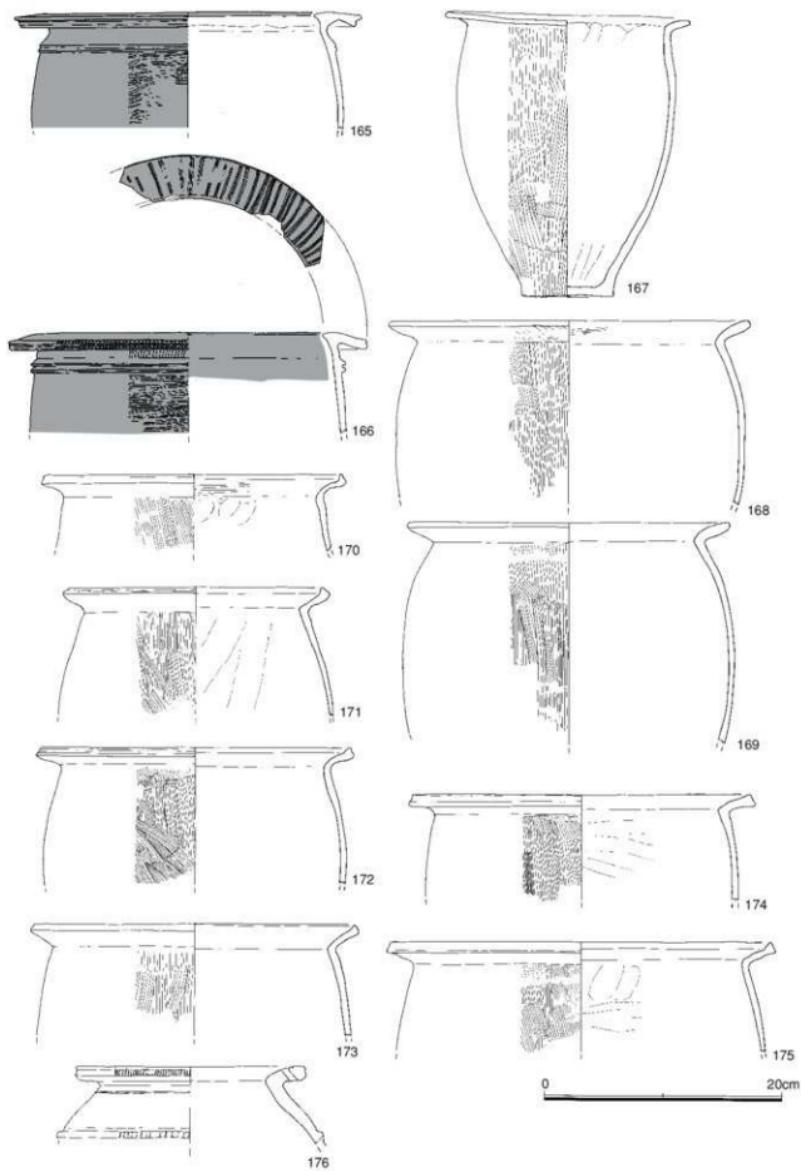


第21図 SX006出土遺物実測図5 (1/4)

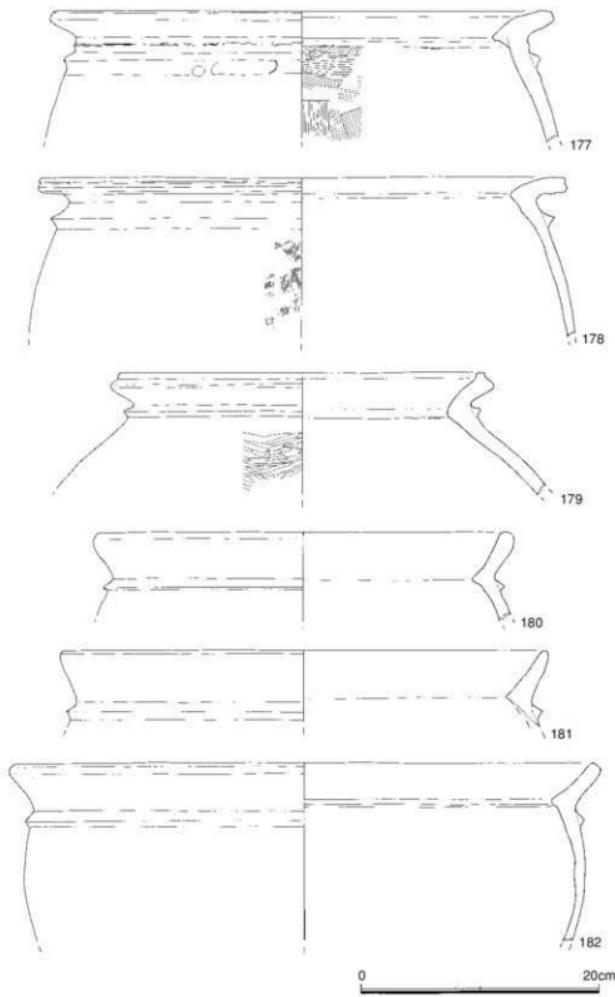
出土遺物（第17～32図） 第17～28図はSX006出土遺物である。81～84はI層出土遺物で、81～83は須恵器である。81は壺蓋、82は外底手持ちのヘラ削りを行う底部破片である。83は内面の当て具痕を丁寧にナデ消している。84は手づくねの楕である。85～121はII層出土及びII層とIII層の接合遺物である。85は弥生時代前期の壺であるが、この時期の遺物は僅少である。大半は中期後半～末に位置付けられる。底部は上げ底のものが少量で多くは平底である。2次焼成により赤褐色化している。90には焼成後の穿孔が認められ、89の外底面にはヘラ削り、92には外底面に満巻状の切り離し痕跡が残っている。甕は口縁部が鋸状を呈するもの、「く」字状のものや端部を上面に跳ね上げるもの、内湾するものがある。98は2次的に被熱し、全体が赤褐色化している。また、器面の剥落が進んだものが多く痕跡的に観察できるものばかりであるが、壺・瓢形土器・高杯などの丹塗り土器がまとまつており、甕棺（119・120）・大型壺（121）などの埋葬用の土器も出土している。甕棺（120）は今回の



第22図 SX006出土遺物実測図6 (1/4)

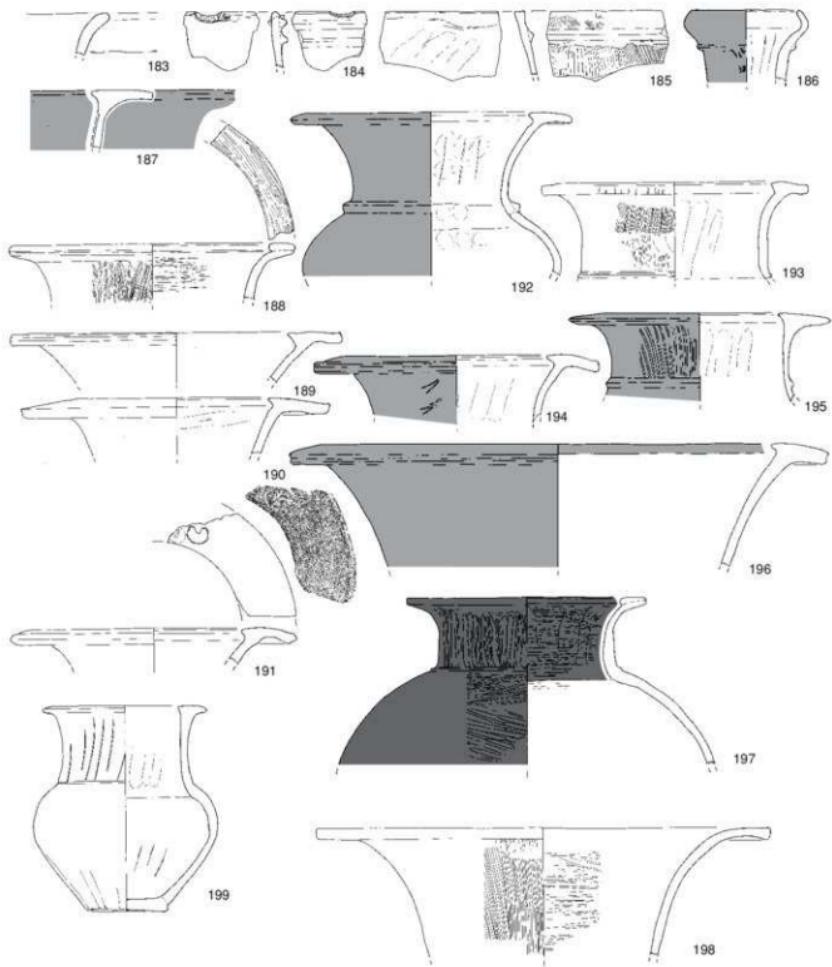


第23図 SX006出土遺物実測図7 (1/4)

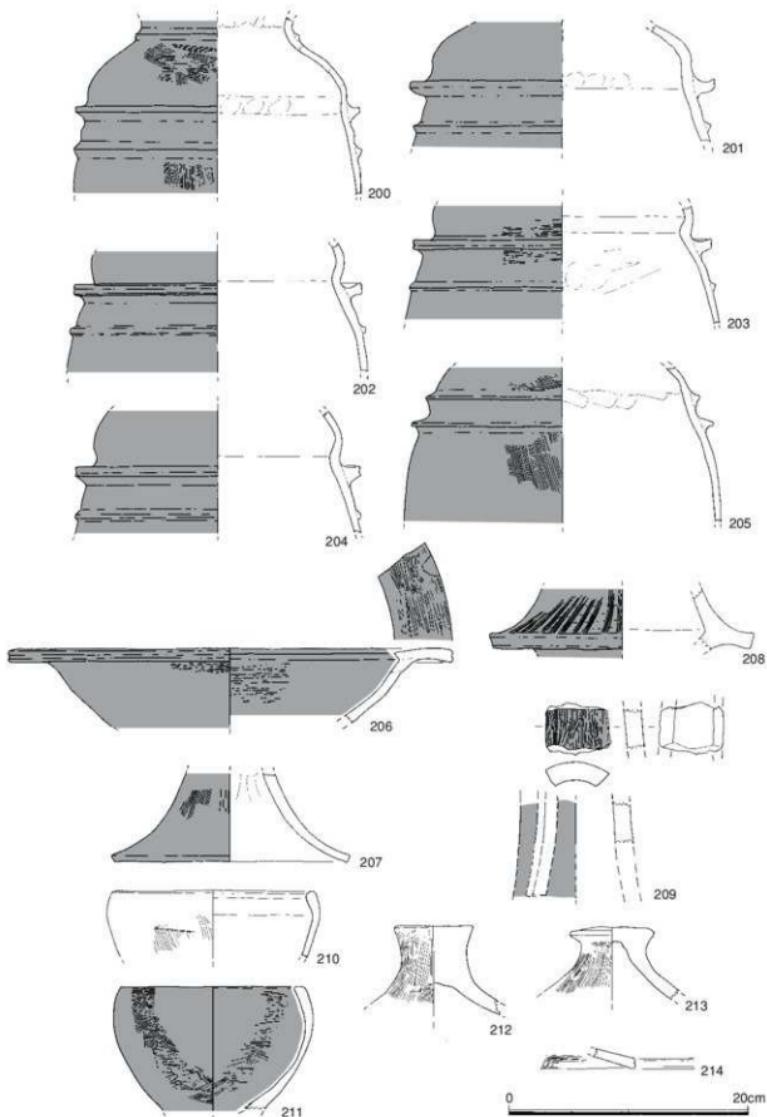


第24図 SX006出土遺物実測図8 (1/4)

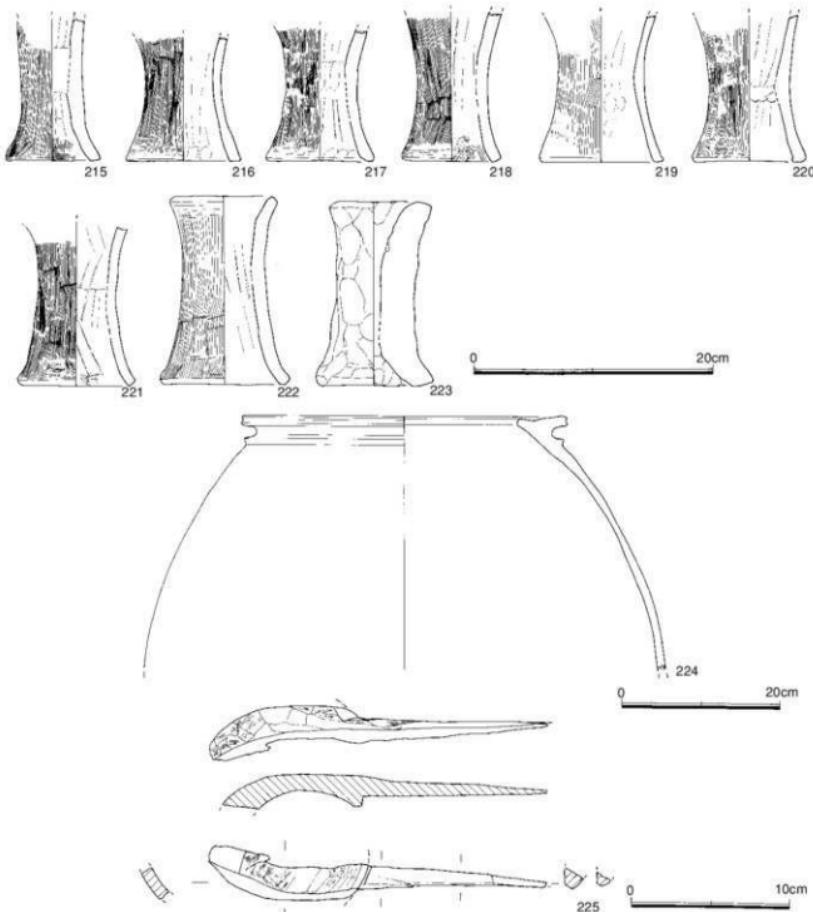
調査では1個体の半分ほどが出土するのみであるが、調査区が限定されていたことを考えると、本来はほぼ1個体分を投棄したものと考えられる。比較的散乱した出土状況より、原位置で破壊されたも



第25図 SX006出土遺物実測図9 (1/4)



第26図 SX006出土遺物実測図 10 (1/4)

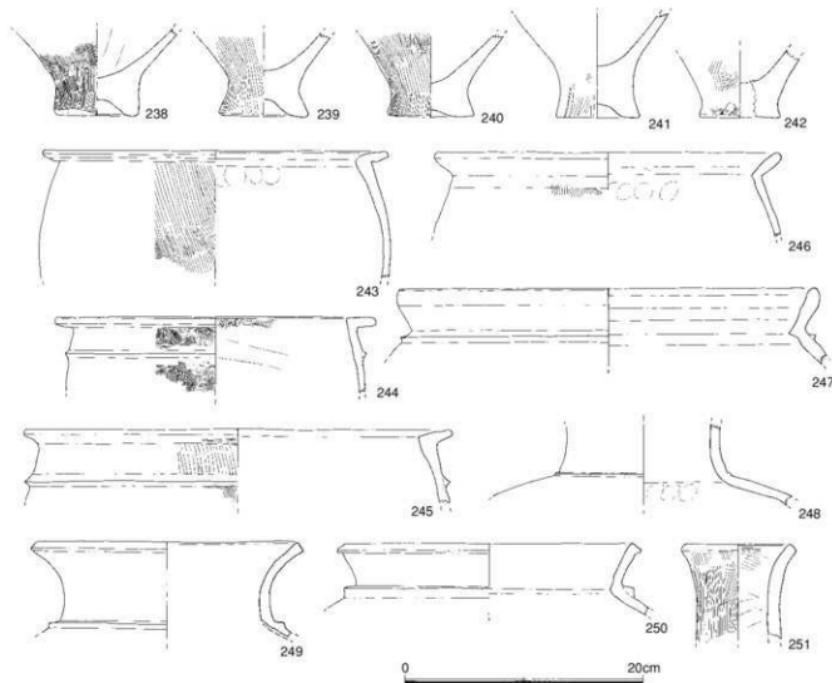


第27図 SX006出土遺物実測図 11 (225は1/3、215~223は1/4、224は1/6)

のでなく、埋葬以前に破損等により使用不能になり、投棄されたのであろうか。122～237はⅢ層出土遺物である。122～130は小型器種で125・130はほぼ完形である。131～149の底部には裾が張り出し上げ底になるもの、端部があまり張り出さず上げ底になるもの、平底になるものがある。135の外底面には円形の刺突痕が残り、137・140・147には外底面からの穿孔が行われる。150～182は甕である。口縁部は如意形・逆L字状・鋤形・「く」字状・端部を跳ね上げる・内湾するものなどがある。外面に煤が付着し使用痕跡をとどめるものも多い。また、165・166は精製の丹塗り土器である。183～199は甕である。丹塗り土器も多く出土しており、197には黒色顔料が観察できる。200～205は瓢

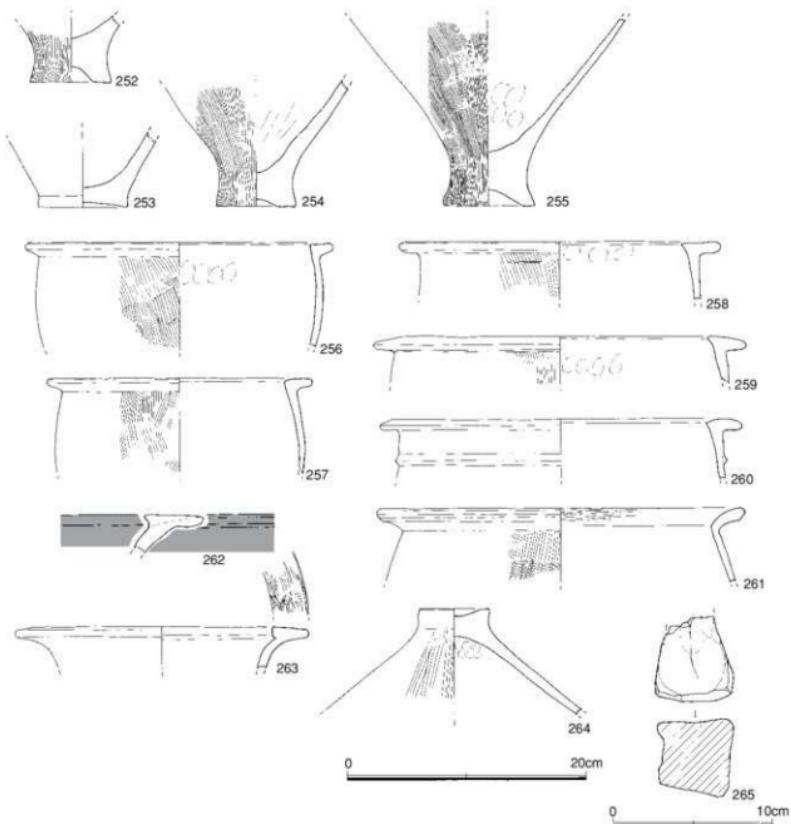


第28図 SX006出土遺物実測図 12 (1 / 3)



第29図 SX009出土遺物実測図1 (1/4)

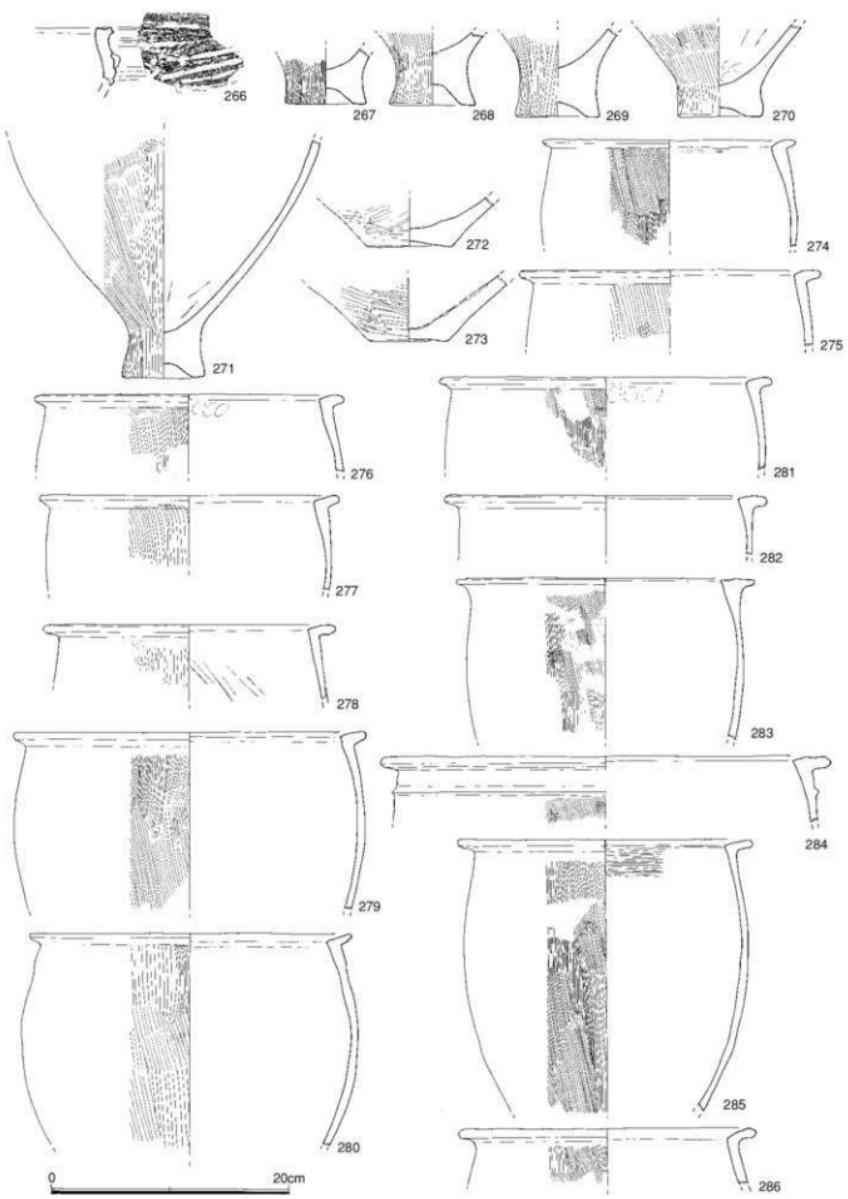
形土器である。206は高杯、207は脚部破片である。208・209は筒形器台破片である。208は鉗～口縁部の一部が残存している。口縁部外面は横位のヘラ状工具によるナデの後、暗文状の縦ミガキを行っている。209は簡透かし部分の小破片である。外面には縦方向のミガキが行われている。210・211は椀である。211には丹塗りを行い、外底には筒部の接合痕跡が残っている。212・213は蓋、214は脚裾の破片であろうか。215～223は器台である。215～222は外面縦刷毛、内面指ナデもしくはヘラ状工具によるナデを行っている。223は芯棒に粘土塊を巻きつけて、指押さえにより成形している。224は甕棺で、上半部のみが残存している。225は木製の杓子である。大半を失っているため形状は不明瞭であるが、表面には黒化処理を行っている。226～237はⅢ層出土石器である。226は小豆色凝灰岩製の石剣である。全体に横位の研磨痕を残すが、刃部の研磨はきめ細かい。基底面には面取りを行う。227・228は頁岩製の石剣破片である。227は風化摩滅が著しい。229・230は石包丁である。229は立岩産の輝緑凝灰岩製で、孔間3.6cmである。230は頁岩製で半月形を呈する。231はシルト質の堆積岩製扁平片刃石斧であるが、刃部先端には研磨による面取りが行われている。232は滑石製の環状石斧を、破損後石匙状の石器に再加工している。233は今山産の玄武岩製石斧である。部分的に研磨によらない擦痕



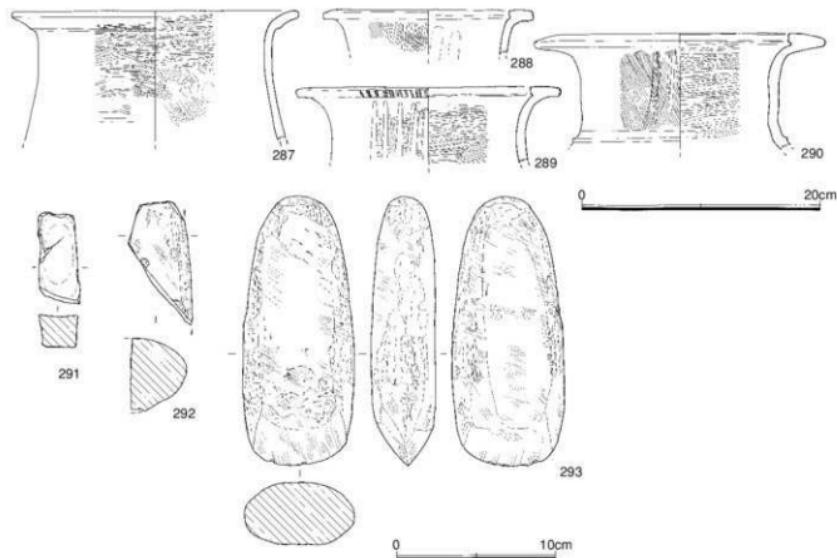
第30図 SX009出土遺物実測図2 (265は1/3、その他は1/4)

が残っており、着柄の痕跡であろう。234～236は砥石である。234は頁岩製、235は砂岩製である。236は自然縁表面が黒色化しており、炭素が吸着したものであろうか。237は黒曜石石核である。自然面は角縁で、上端部からの剥片剥離を行ったものと考えられる。

第29～32図はSX009から出土した遺物である。238～251はI層出土である。壺の底部は上げ底と平底、口縁部には逆L字状と「く」字状がある。240は内面にしっかりと煤が付着している。壺249・250には丹塗りも想定できるが、器面の剥落が進んでおり、明確ではない。252～265はII層出土である。底部は厚手の上げ底と比較的薄手で平底に近いものがある。壺の口縁部は逆L字～鉤形～「く」字状のものが出土している。262は丹塗りを行い、263は表面の剥落により不明瞭である。264



第31図 SX009出土遺物実測図3 (1 / 4)



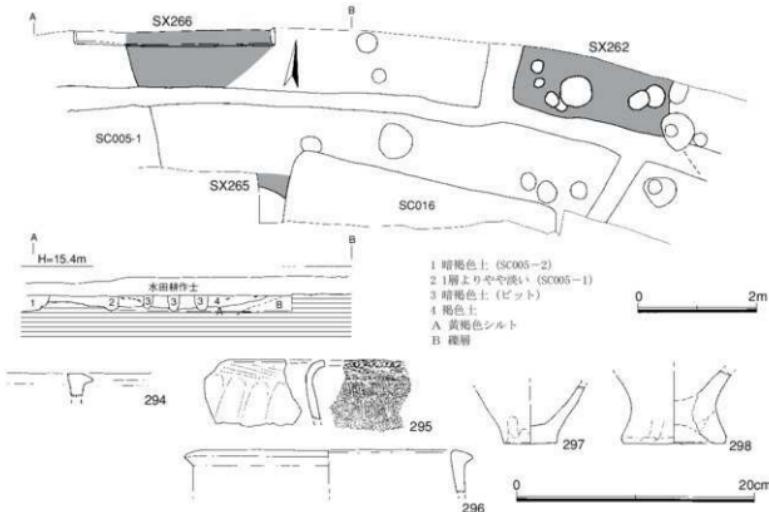
第32図 SX009出土遺物実測図4 (291～293は1／3、その他は1／4)

は蓋である。265は砂岩製の砥石で、線状の刃物痕跡が残っている。266～293はIII層出土である。出土傾向はI・II層と同様である。277・280甕はSX006 III層出土破片との接合関係がある。266は縄文時代後期鐘崎式土器の鉢口縁部である。灰黄褐色を呈し、胎土にはわずかに微砂粒を含む。現状で5条の回線が認められ、縄文は認められない。また口縁端部からの橋状の把手は剥落して失われている。287は弥生時代前期の甕である。口縁部外面を肥厚させ、段を有する。291は砂岩製の砥石である。292・293は玄武岩製の石斧で、293は29層出土のほぼ完形品である。

SX262・265・266 (第33図、写真35)

調査区北側、SC016周辺の3箇所で弥生時代前期～中期初頭の遺物が出土したため掘り込みを精査したが明瞭には認められなかった。SX266土層からは遺構面の黄褐色シルトと判別が困難であるが、レンズ状に褐色シルトが堆積し、遺物もこの堆積に沿って出土しているようである。人為的な遺構ではなく、自然のくぼみに堆積したものとも考えられるが、識別できなかった遺構である可能性も残されている。今回は詳細不明であるため、包含層として報告しておく。SX265についてはSK018土層(第14図)を参照。出土遺物は、SX262は小破片のみで中期初頭から前半代の遺物がある。SX265は弥生前期の甕・甕破片が出土している。SX266は中期の初頭に位置づけられる小破片の遺物がまとまっている。

出土遺物(第33図) 294はSX262出土である。甕の口縁部で外面に粘土帯を貼付け、断面三角形を呈する。295はSX265出土の如意形口縁を呈する甕である。296～298はSX266出土である。296は口縁部断面三角形を呈する。底部は297が小形の平底、298は厚手の上げ底である。



第33図 SX262・265・266 及び出土遺物実測図 (1/80, 1/4)

5) その他の出土遺物

ピット出土遺物の概要

建物としてのまとめ得たものはないが、ピット埋土は大半が黒褐色もしくは暗褐色であり、調査区北側及び南側コーナー付近では方形・円形掘り方のピットがそろう部分もある。出土遺物は弥生時代中期の土器片が主体となり、一部弥生後期・古墳前期の土器が認められる。なお、須恵器はごく少量しか出土していない。

6) 小結

今回の調査地点では、弥生時代中期後半以前には谷地形が入り込み、低地が存在していたことが明らかとなった (SX006・009)。この時期までの遺構としては、まず弥生時代前期末～中期前半に認められる (SC010, SK011・014)。この後、中期後半代には周辺に大規模な集落が形成されたものと考えられ、低地には日常土器のほか櫛柄、祭祀土器など多量の土器や石器・木器などの多くの遺物が投棄されていた。本地点では該期の集落について良好な遺構は少数であるが (SK012・013・018)、周辺の調査成果によると、この時期の遺構は前代に比べても飛躍的に増加しているようである。

古墳時代においては、低地が埋没し、微高地に取り込まれることになった中期～後期に竪穴住居跡 (SC003・005-1/2・008・016)・土坑 (SK004・015) 等が認められる。SC005-1・2には中期前半代の甕が確認された。これにやや後出すると考えられる SC008 では、住居貼床直前に火気を使用した痕跡が残っており、出土甕もこれに使用された可能性が考えられる。出土状況より竪穴住居建築に伴う行為として注目される。更に、後期の SC016 でも甕が確認できる。

今回の調査は限られた範囲の中で行われたものであるが、微地形の形成・集落の展開等を考える上で貴重な成果を得ることができた。今後周辺の調査が進み、多くの知見を得ることができれば、更に本調査成果の正確な位置付けが可能となるであろう。



写真6 調査区南東部（上空から）



写真7 調査区北西部（上空から）



写真8 SC003（北から）



写真9 SC003（北西から）



写真10 SC005-1・2（西から）



写真11 SC005-1・2 完掘状況（西から）



写真12 SC005-1 窓（西から）



写真13 SC005-1 窓土層



写真14 SC005-2 窓（北東から）



写真15 SC005-2 窓土層



写真16 SC008（北から）



写真17 SC008 完掘状況及び土層

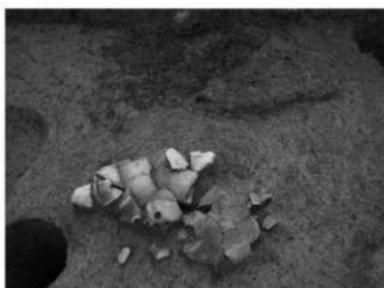


写真18 SC008 貼床除去後出土状況（北西から）

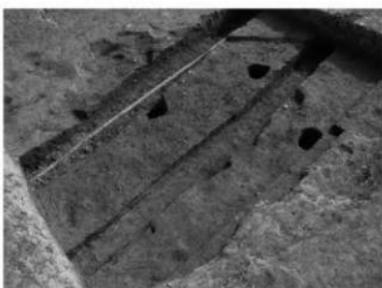


写真19 SC010（北西から）



写真 20 SC016 (西から)



写真 21 SC016 完掘後 (西から)



写真 22 SC016 罐 (南から)

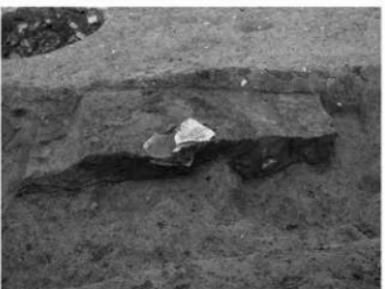


写真 23 SC016 罐土層

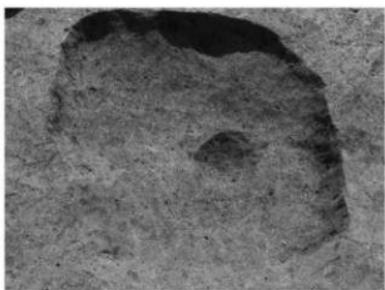


写真 24 SK001 (北西から)



写真 25 SK002 (南西から)



写真 26 SK004 (北東から)



写真 27 SK004 遺物出土状況 (北西から)



写真 28 SK011 (東から)



写真 29 SK012 (南西から)



写真 30 SK014 及び土層 (南から)



写真 31 SK018 土層



写真 32 SX006 土層 1



写真 33 SX006 土層 2



写真 34 SX009 土層



-42 -

写真 35 SX266 土層

書名ふりがな かまたへきばる10
書名 蒲田部木原10
副書名 蒲田部木原遺跡第12次調査報告
巻次
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1074集
編著者名 長家伸
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 20100323
作成法人 I D
郵便番号 810-8621
電話番号 092-711-4667
住所 福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな かまたへきばるいせき
遺跡名 蒲田部木原遺跡
所在地ふりがな ふくおかしひがしくかまた3ちょうめ751ばん2
所在地 福岡市東区蒲田3丁目751番2
市町村コード 40131
北緯 33度38分4秒（世界測地系）
東経 130度29分15秒（世界測地系）
調査期間 081020～081205
調査面積 375m²
調査原因 育苗施設建設に伴う造成工事
種別 集落
主な時代 弥生・古墳時代
遺跡概要 弥生時代の低地包含層から多量の遺物が出土した。また低地が埋没した古墳時代中～後期には堅穴住居跡を中心とした集落が形成されており、堅穴住居跡には竈が設置されている。

特記事項

